

## 第二章 縄文時代

### 第一節 はじめに

縄文時代の研究は、日本考古学の第一歩とともに歩んできている。明治一〇年、当時東京大学の生物学の講師として日本に赴任したE・S・モースによって、日本で最初の学術調査をされた大森貝塚<sup>①</sup>が、縄文時代のものであったからである。明治時代の研究は、主として土器とそれを残した人種論が主流であった。縄文土器を残した人種をアイヌ人<sup>②</sup>とするものや、あるいはアイヌの伝説上のコロボックル人種<sup>③</sup>であるとする諸説が学界を賑わしたのである。

大正時代に入ると、学界にはヨーロッパで学んだ人々によって新しい方法論が出現する。層位論<sup>④</sup>の導入である。この方法によって異った土器型式の年代を比較することが可能になった。すなわち、時間の「ものさし」を作っていくことになり、昭和の学問へと続く。

昭和に入り縄文時代の研究は、縄文土器の施文原体<sup>⑤</sup>である縄を土器の上にくわすことに始まり、この方法による分類によった型式の設定に基づいて、日本全国の縄文時代を早期と晩期にいたる五時期に大別し、これもさ

らに細分・比較することによって文化相の比較をする方法が行われた。この方法によって、縄文時代の研究もようやく学問として一人立ちする時代となる。こうした研究も戦争が開始され一時中断されるが、戦後になりまた新たな時期に入る。昭和二四年岩宿遺跡の発見は、縄文時代の研究にも大きな影響をあたえた。学界は最古の縄文文化と、先石器後代の接点をもとめて奔走した。

戦後の考古学史上特筆すべきものとして、自然科学の方法論の導入をあげることができる。縄文早期の夏島貝塚<sup>①</sup>において出土した貝殻のC14<sup>②</sup>の測定結果は、紀元前七千年をこえ、この土器群を世界最古の土器としたのである。この結果は、これまでの型式による編年を行ってきた学者が考えていた、紀元前二千五百年と推定した年代と大きなへだたりを持っていたために論争となった。この点については、次節の草創期のところで述べることにしたい。

## 第二節 研究における時間と地域

土器には、機能（煮沸・貯蔵）的側面と、文様やその構成によって飾ることから、社会的側面も共有している事実がある。先史社会の研究を歴史として理解してゆくためには、年代の前後を明確にする必要がある、この点に土器の特性を利用してゐる。一つ一つの土器には各々個性があつて、どれ一つとして同じものがない。しかしながら、この中にもある一定のまとまりがある。その特徴を認識し、「型式」を設定する。世代の交代や自然・社会環境の変化によって土器も変化するので、これを研究の際の時間の尺度として利用する。型式名はそれぞれ、その時代の著名な遺跡の名称を与えて呼ばれている。これを層位や伴出関係を整理することによって、時間的な前後関係を明らかにする。そして、それを整理したものが別表（第1表）に示した編年表である。土器型式

第1表 縄文時代編年表

		日高町内の遺跡		文様の単位
草創期	隆起線文 爪形宮寺 大川	神鍋・山ノ宮 神鍋・山ノ宮 ?	土器文化の開始	凹押型 凸文
早期	(尾上) 福本 (高山寺) 穂山谷 石山 II " III " IV " V " VI	神鍋 水上 ? .....	条痕文土器群の出現 纖維土器群	条痕
前期	(安土N上層) 北白川 I a " I b 北白川 II a " II b " II c 北白川 III 大歳山	? 神鍋・山ノ宮 ? .....	爪型文の出現 羽状縄文の出現 特殊突帯文	縄文(撚糸文) 爪形突帯文
中期	船元 I " II " III " IV 里木 II " III	? ? ? .....		
後期	中福田 津 K II 彦崎 K I 一乘寺 K I 元住吉山 K I " K II 宮 滝	神鍋・山ノ宮 山ノ宮 水上 ? ? ? 森山	磨消縄文の出現 粗製精製土器の分化  縄文なくなる 凹線文, 扇状圧痕	条痕
晩期	滋賀里 丹原治 樫原 I " II 船 橋	祢布ヶ森東 ? 祢布ヶ森東 ? ?	黒色研磨土器の出現  突帯文の出現	

の差異は時間だけではなく、地域的にも変化して現れる。これは自然環境の差によっても生れるが、多くの場合、それを製作した人々をとりまく社会環境の差と見なす方が妥当である。これらのことから、土器の顔がその社会あるいは人々の生活の状態を示しているともいえるし、またそれらの分布状況や移入問題を取り上げ研究することにより、人々の交流や物資の交易などのことを知る手段となるわけである。

ここでは、草創期から晩期にいたる時期と、その構成を編年表にしたがって説明する。また地域性については、町内の遺跡の説明の後に、但馬地方の諸遺跡との関係を含めて述べることにする。

### 草創期

日本における土器の出現は、自然科学の研究成果から約一万二千年、あるいは一万年前とかの見解が出されている<sup>⑩</sup>。これは土器や石器の形式比較から考えられた年代と大きく異なり、学界を対立させる問題ともなった。その後資料の蓄積に加え、新しい自然科学による研究方法<sup>⑪</sup>の発達などから、現在は、ほぼこの自然科学によって測定された数値を信じるのが妥当性をもってきた。この数値から、現在のところ縄文土器は、世界最古の土器であると考えられている。

最近中国においても細石器とともに土器が出土したとのことで、日本を始めとする東アジアのどこかで、土器が発生した可能性はある。しかしこれらの土器群がその後の世界各地の土器の源流であるかどうかについては、なお今後に残された研究課題である。

さて、現在の時点で日本における最古の土器は、昭和四八年長崎県泉福寺貝塚<sup>⑫</sup>で発見された「豆粒文土器」<sup>⑬</sup>である。この土器群は、それ以前最古とされた同県福井洞穴<sup>⑭</sup>で発見された「隆起線文土器」<sup>⑮</sup>より下層で発見されたものである。文様は楕円形の粘土の粒を口縁部に付したものである。隆起線文土器は、現在隆帯文・細隆文・微

隆起線文などに分けられ、一括して隆起線文土器群と呼ばれることもある。福井洞穴では隆起線文土器の上層から「爪形文土器」も出土している。この爪形文は、前期の西日本全体に出現する半載した竹管や、貝殻の腹縁による爪形文とはニュアンスが異なり、ヘラ状工具あるいは、人間の爪によって施されたものである。なかには「八字型」のものがあり、「八字型爪形文」と呼ばれ、より古い様相とされている。この時代の遺物は全国的に出土例も少なく、全体的に共通の様相が強い。しかし共伴する石器およびその組成が異なっている。九州では細石器を伴い、本州では有舌尖頭器を伴う例が多い。しかし本州でも長野県諏訪湖湖底の曾根遺跡や、岐阜県柘ノ湖遺跡などでは、「曾根型石核」と呼ばれる細石器の様相の強い石器が、爪形文の時期まで続くことも見逃すことができない。草創期の編年は、豆粒文から爪形文までの時期を草創期前半と呼び、神宮寺型押型文、押圧縄文・捺糸文などの時代を草創期後半とする。

前半の編年は全国各地で地域性が少なく齊一的に行えるのに対して、後半の編年は各地方に出現する土器群の地域性とも関係して、非常に複雑になってくる。例えば、現在のように押圧縄文↓回転縄文↓捺糸文と変遷する年代観をあたえれば、西日本においては前半と後半の間に大きな不連続性が認められる。泉福寺洞穴の発掘調査において、明確な不連続性が認められないとする調査者の意見を参考にすれば、現在の編年体系の中に、地域差と時間差の認定の誤りがあるのではないかという疑問が生じるように思われる。このような編年の不連続性は今後の大きな課題であり、この問題の鍵をにぎるもの一つに「神宮寺型押型文」の問題がある。この文様構成および施文技術は、続く早期前半の回転押型文の祖型であり、同時に沈文に伴う山形文や沈線文から、回転手法の存在も肯定できる。そして一説には、押圧縄文に併行するとの意見もある。

## 早 期

編年表において尾上↓福本↓高山寺↓穗谷の各型式が、現在までの近畿地方での編年観であり、瀬戸内や山陰地方でもほぼ同様になされている。この四型式は、通常「回転押型文」と呼ばれ、早期前半を代表する土器群で、九州地方から関東地方まで広く分布している。尾上式は、滋賀県琵琶湖湖底出土の土器を標式としたもので、砲弾形の尖底の器形に山形文を施したものである。福本式と呼ばれるものは、兵庫県神崎郡神崎町採集の土器を標式としたもので、尖底の器形は尾上式と同様である。山形文のほか小粒の楕円文を含み、岡山県黄島貝塚の土器などに類例を求めることができる。高山寺式は、大粒の楕円文を施し、施文が非常に粗雑であり、さきの二型式が横方向に主として施文されるのに対して、この型式のものは縦方向に施文し、内面に沈線を施すことも多い。これに続く穂谷式は、大きな山形文と複合鋸歯文や腹部の突帯などを特徴とするものである。これに続く早期後半の土器は、滋賀県石山貝塚の土器に代表される条痕文土器群である。この土器群は、層位を基にⅡ～Ⅶの六つに分類され、それぞれ東海地方と関東が強いといわれている。また、京都府宮ノ下遺跡では、平底に縄文を施す土器群が検出され、山陰地方を含む日本海沿岸地域に、さきの条痕文文化に対峙する文化の存在が予想されている。

## 前期

前期の土器と早期以前の土器の間には、大きな機能の差がある。早期以前の土器の場合、尖底あるいは丸底が中心であるが、これは煮沸の際の熱利用の有効性を考慮したものとされている。前期には底部の平底化が進む。



第4図 前期の土器 (大阪府国府遺跡出土)

これは煮沸とともに貯蔵が土器の重要な機能として付加された現れである。

安土N上層式<sup>⑩</sup>とは、滋賀県安土遺跡出土の土器を標式としたものである。早期の条痕系土器群の残影を強く残し、東海地方の木島式<sup>⑪</sup>の影響のもとに成立したもので、類例は少ない。これに続く北白川式土器群<sup>⑫</sup>は、半載竹管あるいは貝殻腹縁を用いて爪形文で飾る。I式は、アルカ属の貝殻を用いた条痕を表裏に残す。II式は、腹部以下に羽状縄文<sup>⑬</sup>を施し、上半を爪形文で飾る。III式と大蔵山式<sup>⑭</sup>には、特殊突帯文と呼ばれる突帯上に爪形文が付加される。ただし、北白川III式には羽状縄文<sup>⑮</sup>があり、大蔵山式には、斜行縄文のみが地文となる。これらの北白川土器群は、瀬戸内地方の羽島下層II式<sup>⑯</sup>、磯ノ森式<sup>⑰</sup>と強い関連性をもち、ほぼ同質の文化と考えてさしつかえない。また東海地方の土器にも強い影響をあたえた。

## 中 期

中期に入ると中国・近畿地方には、前期末の大蔵山式の伝統を受けついでキャリパー形<sup>⑱</sup>の器体、その全面を縄文地文とし、隆帯上に爪形文を施した「船元I式土器<sup>⑲</sup>」が成立する。ただ瀬戸内地方と近畿地方の間には、形態や量構成の中に差異が認められ、同質であるが同一ではない。船元式は、通常I式からIV式に分けられる。続く里木式<sup>⑳</sup>もII式とIII式とに分類される。里木式には、撚糸文を地文としたものが見られ、その上を沈線や竹管を用いて文様を構成する。近畿地方においては、中期の資料は断片的に発見されているにすぎない。琵琶湖東岸地域では、東海地方との関連の強いものが出土している。

## 後 期

後期に入ると中国・近畿地方には中津式<sup>㉑</sup>・関東地方には称名寺式<sup>㉒</sup>という磨消縄文<sup>㉓</sup>の土器が出現する。磨消縄文とは、沈線によって区画した部分に縄文を施し、区画外の部分には研磨を加えて磨消すものである。関東の称名

寺式・西日本の中津式とも同質であるが、モチーフに差がある。中津式の分布範囲は、山口県から大阪府・奈良県を結ぶ西日本地域、東海地方の太平洋岸・九州の一部と非常に広範囲である。これに対し福田KⅡ式<sup>⑧</sup>は、瀬戸内・山陰と兵庫県あたりまでの小さな範囲で分布し、大阪府などには関東地方の土器型式が成立している。後期も中葉に入ると近畿地方や瀬戸内では津雲A式・彦崎KⅠ式<sup>⑨</sup>などと呼ばれる、縁帯文という厚い口縁部を持つ土器が流行する。文様は、口縁部内外および胴部以下に集中し、以前の全体を文様で飾るものと一線がひかれる。

一乗寺KⅠ式は、京都市一乗寺遺跡<sup>⑩</sup>で検出され、津雲式から元住吉山KⅠ式<sup>⑪</sup>にいたる中間型式といわれるが、実態は明らかでない。元住吉山KⅠ式および、KⅡ式は、神戸市元住吉山遺跡出土の土器を大阪府四条畷市更良寺遺跡<sup>⑫</sup>の出土状況をもとに二分したものである。KⅠ式は、縁帯文の文様帯がさらに進み、沈線と磨消縄文で文様が構成されている。沈線と沈線を「C字状」に結ぶもの、沈線の末端に刺突を加えるのが特色である。

KⅠ式とKⅡ式の間には、縄文技法の消失という伝統との断続が起きる。元住吉山KⅡ式・宮滝式<sup>⑬</sup>に代表される後期後半の土器群は、「凹線」と呼ばれるヘナタリなどの巻貝を用いて施された太く浅い線によって構成される。元住吉山KⅡ式の場合、三条ノ数条の凹線文を口縁部・胴部に平行に施文し、その上にヘナタリの側縁と先端を用いて列点を施す。口縁部内面に沈線を引き、斜めに刻目を付すものもある。また「く」の字状に屈曲した口縁部を持つ注口土器（土瓶）があり、また粗製土器の深鉢は外反する口縁部、平坦な面を持つ鋭い感じの端部のもので、口縁内には精製土器同様の刻目を持つものがある。宮滝式の場合ヘナタリの側圧痕が進化し、六〇度くらい回転させた「扇状圧痕」<sup>⑭</sup>が出現し、凹線も三条が基本となり多条のものは少なくなる。粗製土器も口縁部近くで段をもって屈曲するものが主流をなし、端部も丸くなる。



晩期に入ると滋賀里・丹治<sup>⑩</sup>・樫原Ⅰ式<sup>⑪</sup>、後期末の宮滝式の伝統をもとにした深鉢と「黒色研磨土器<sup>⑫</sup>」と呼ばれる浅鉢の精製土器群と、これに条痕文によって調整された粗製深鉢形土器を加えた、三者一体の型が現れる。滋賀里式によって始まる狐状沈線文は、樫原式に至って後の弥生土器の木ノ葉文<sup>⑬</sup>の祖型となる七宝文<sup>⑭</sup>へと発展する。丹治式と呼ばれる一群は、口唇部の刻目や竹管爪形文によって代表されるもので、瀬戸内の原下層式に近いものと考えられる。これに続く樫原式を編年表では、Ⅰ・Ⅱ式に細分した。Ⅰ式はさきにもふれたが、精製・粗製三者の継続された時期で、Ⅱ式は突帯文の出現や浅鉢の衰退、それにもなう三者の崩壊などに現れる。土器は突帯文によってのみ飾られることが基本的で、そのほかは突帯上の刻目、胴部の中央付近に横走する爪形文などに限られていきわめて単純な文様となる。この場合突帯は一条のものである。奈良県樫原遺跡はこの時期で終わっている。

船橋式土器は、大阪府船橋遺跡のものを標式としたもので、深鉢と壺がある。文様は、口縁部と胴部にそれぞれ各一条の突帯が付される。

以上のように草創期から晩期に至る六時期の各型式を文様を中心に述べたわけであるが、これをとりまく多くの問題は、後の第三節で述べることにする。最後に編年表は近畿中央部のものをもとにし、不足を補うために中部瀬戸内のものを一部入れた。但馬独自のものも近い将来作成できると思われるが、現状では混乱をまねかないように、この編年を使用することにした。

### 第三節 町内の遺跡

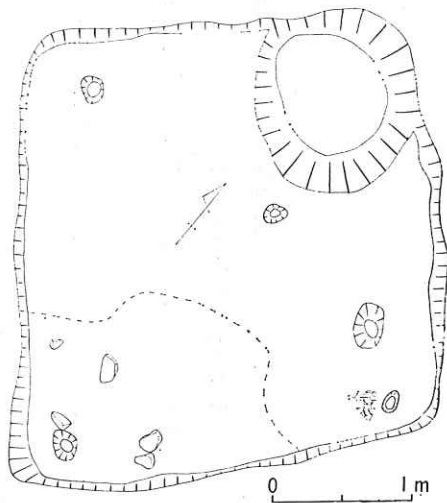
#### (1) 神鍋山遺跡

神鍋山遺跡はスキー場として有名な標高四七七メートルの神鍋山の北方約一キロメートルの地点に所在し、水山峠に源を発する小河川の兩岸、標高三八〇メートル〜三二〇メートルのゆるやかな斜面に位置する。遺跡は点在する配石遺構を中心に分布する様相が認められ、遺物の分布状況から一二個所の小地点に分けられる。遺物は草創期から晩期に至る各時期のものが採集され、特に早期・前期の遺物の出土量が著しい。昭和四四年一〇月から三週間の発掘調査が行われ、住居址、配石遺構を検出するとともに、土器・石器が出土し、多くの収穫が得られている。昭和四五年に概報が公刊されている。ここではこの成果をもとに遺構と遺物の説明を行うことにする。発掘調査は三個所で行われ、それぞれ第一地点・第二地点・第三地点とされている。

### 遺構

遺構は、第一地点より住居址一棟、貯蔵穴<sup>㉑</sup>二個、配石遺構三個、第二地点より配石遺構一個が、第三地点より配石遺構が一個検出されている。第二地点は押型文（早期）の時期で、第一・第三地点が爪形文（前期）の遺物を伴っている。

第一地点の住居址（第5図）は、一辺三・五メートル×三メートルの長方形の竪穴住居で、六個の小形ピット（穴）と北隅に貯蔵穴を持っており、散乱した焼礫から屋内炉を持っていた可能性がある。また、上屋構造は、



第5図 竪穴住居址

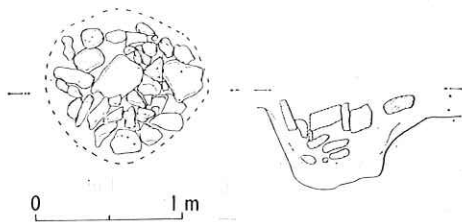
四本の柱で支えたようであり、周辺部に三個の柱穴が認められ、他の一つについては何らかの攪乱（耕作・開墾等）によって調査前に破壊されたようである。また南隅から中央付近にかけての攪乱がはげしいことから、炉址はこの部分にあったと考えられる。

第一地点において検出された三個の配石遺構は、ほぼ円形に石を集めて作ったもので同様の性格と思われる。ここでは第6図の一号配石遺構の説明をすゝるとどめる。一号配石遺構は直径約一メートル、深さ五〇センチ程度のほぼ円形に掘りくぼめた土壙の中に、三〇センチ×一〇センチほどの扁平な礫によって作られている。礫の表面は、火熱を受けて赤く焼けている。これらの配石遺構は、ニューギニアなどの原住民の民族例にみられるように、焼石を用いた蒸し焼き料理に使ったものと考えられている。

また、神鍋山遺跡の検出された遺構の中で特に注意するものとして、第一地点三区・四区で発見された貯蔵穴（袋状）があげられる。この二個の貯蔵穴をそれぞれ第一号（第7図・上）・第二号（第7図・下）として説明する。

第一号貯蔵穴は、上部の径約二メートルの不整形円形で、底部径二・五メートルのほぼ円形をなし、深さ八〇センチを測る。北西部隅には底面に接して底部を欠損した深鉢（前期後半）が口縁部を下にして置かれている。このような類例は、前期にはなく、中期に住居址内に伏せた甕が長野県や関東地方に多く見られる。この場合も、底部は切削されることが多く、一種の埋葬形態を示したものとされている。時期や地域を異にすることから速断はできないが、神鍋山遺跡の場合も墓塚として使用した可能性はある。

第二号貯蔵穴は、上部一・四メートル×一メートル、底部一・八メートル×一・五メ



第6図 配石遺構

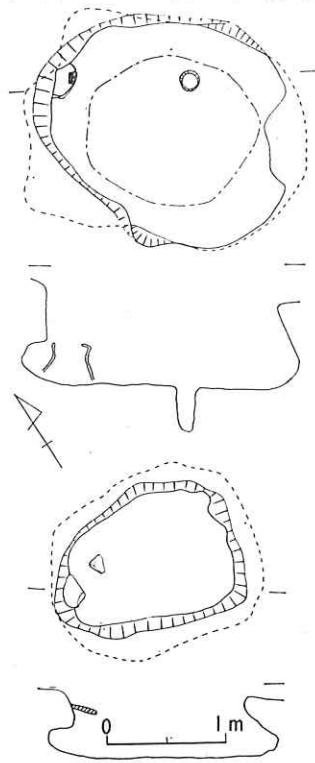
1トルの不整形の隅丸方形で、貯蔵穴内に当時の収蔵状態のまま炭火したカヤの実(図版5・下)が検出された。

第二地点では配石遺構一個所が検出されている。これは先に説明を行った、第一地点のものとは構造上の違いがある。先の第一地点のものは比較的大きな礫で整然と組まれているのに対して、第二地点のものは大小の石が散乱した状況が認められる。このことについては、調査者は何らかの遺構の性格差があるのではないかと述べられている。しかし、散乱する石には一つの規則性が見られるようで、図版3では左上・左中・右下の三か所にわずかな地表の窪みと大型礫の集中している部分が見える。このことから配石遺構は大型の一つの配石遺構ではなく、三個の配石遺構の群集したものではないかと思う。そして、形態の違いは、性格あるいは用途の違いと考えるよりも、むしろ廃絶状態の違いによるものと考えられる。

第三地点でも配石遺構が二個検出されている。状態・状況とも第一地点と多くの共通点が見られるが、第一地点のものと比較して小形の礫によって構成されている。なお下部構造の状況は不明である。

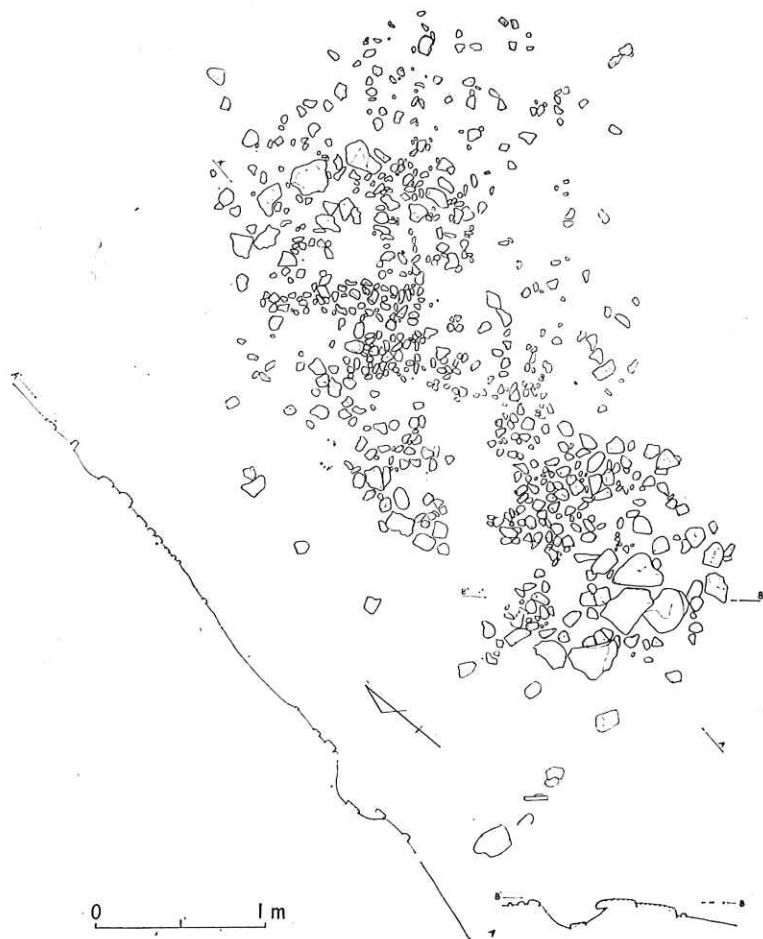
### 遺物

神鍋山遺跡の出土遺物は、地元の研究者によって採集されたものや、昭和四四年に調査で発見されたものを合わせて土器片数千点、石器類数百点をこえる膨大な量である。そして時期も草創期から晩期に至るもので、小



第7図 貯蔵穴

期間の断続は認められるものの極めて興味深いものも多く含んでいる。ここでは調査によって出土した、第一地点、第二地点のものを説明するが、これによって神鍋山遺跡の全容やその重要性を適確に引き出すことは困難である。なお調査の際の呼称と採集の地点の表示と同一ではない。ここで紹介する遺物は全遺物の数パーセントに満たない量であるし、それをもって知ることができる遺跡の内容に



第8図 配石遺構

ついても氷山の一角と言える。

第一地点では前期のものが主として出土し、わずかに後期のものが検出されている(第9図)(図版8)。

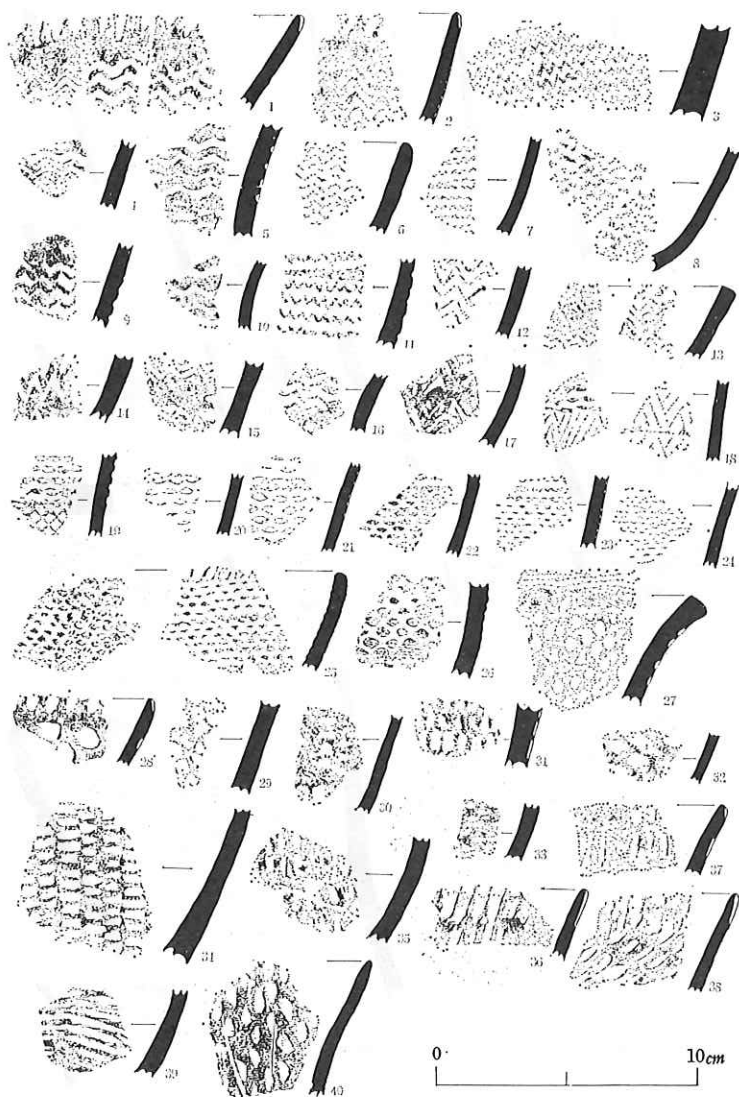
前期のものは北白川Ⅰ式あるいは羽島下層Ⅱ式に類似、併行するものを第一類(第9図1・5・8・14・16・18)とし、それに続き北白川Ⅱ式あるいは瀬戸内海地方に分布する磯ノ森式に併行するものを第二類(第10図1・4・6・7)、特殊突帯文に代表される大歳山式あるいは里木Ⅰ式に併行すると思われる、前期末に編年されるものを第三類(第10図12・図版7)に分類できる。

第一類のものは、アナダラ属貝殻によって調整された条痕と爪形文、刺突文によって飾られるもので、縄文の使用はない。爪形文は幅の広いものと(5)、幅が狭く深い刺突状(結節状)のもの(8・13)などがある。また、刺突文は二列並列に施文したもの(10・14・18)が顕著に見られる。そして爪形文、刺突文とも口縁部に対して平行、横方向に施すものが多いが、なかには斜方向に施すもの(13)がある。

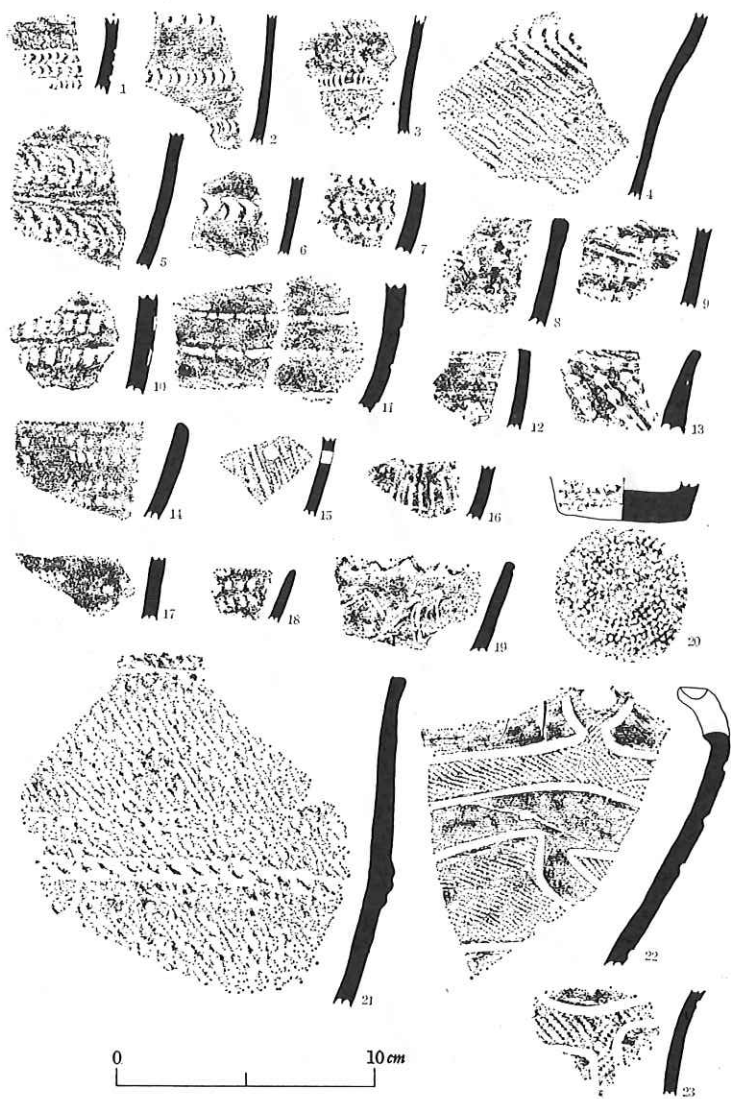
第二類は北白川Ⅱ式、磯ノ森式とほぼ近い様相を示している。

これに続く第三類は、先の二型式が、近畿・瀬戸内地方の土器と同一かあるいは非常に近い。その他に第一地点では後期に属する土器片(第10図22・23)が若干出土している。これらの土器は遺構に伴ったものではなく、何らかの要因で後に混入した可能性が強い。しかしながら、第一地点付近に後期の遺構が存在すると思われる。次に遺物の紹介をすることにする。

ここで紹介する土器は、後期前半に編年される中津式土器で、器形は深鉢形のものである。22は、波形の口縁部の頂点に円形凹部を作り、それを基点に沈線を口縁に平行に描き、沈線と沈線の間を縄文でうめる、いわゆる磨消縄文によって飾られた精製深鉢土器である。施文および土器表面の調整は非常に丁寧(へらみが)に篋磨(へらみが)きによって行わ



第9图 第1地点出土土器



第10图 第2地点出土土器



れ、口縁の波型頂部には丹塗りが施されている。

また、同時に発掘調査された第二地点では、神宮寺型押型文と、山形、楕円文、回転押型文が出土している。ここでは、文様、型態の分類を行なって説明することにして、これにかかわる草創期と早期の区分、あるいは神宮寺型押型文と回転押型文の編年の関係や、他の但馬地方の諸遺跡との関連性などについて、第三節において述べることにする。

そこでまず、第二地点の出土遺物は、神宮寺型押型文を第一群、一般的な回転押型文を第二群と分類して述べる。

#### 第一群（第9図・4・5・10・17・27～40）

第一群の中にも施文原体の型態や施文方法によって生じる、いくつかの文様の違いが認められる。それは押圧手法、半回転押圧、回転手法に代表されるもので、これに平行移動、半段ずらしなどの手法と併用することによって各種の文様ができるのである。ただ、押圧、半回転の見きわめは非常にむずかしい。この場合の原体は円棒にへ字状刻目を入れたもので、それを水平や斜めに方向を変えている。30・32～34は押圧、半段ずらしによるもので横長の楕円文が段違いになって表われ、39は同様の原体を回転させることによって作り出している。また38は斜めに施された楕円形、6は円形、31・35・40は縦長の楕円形を押圧手法によって作り出している。また4・5・10の山形文は回転手法によるものである。これらの中にあつて27の口唇部に捺糸文を施し、捺糸文土器との関連上特に注意を必要とするものである。

#### 第二群（第10図1～3・6～9・11～16・18～26）

第二群も山形文（1～3・6～9・11～16）、楕円文（20～26）、複合鋸歯文（18）、格子目文（19）などがあ

る。山形文は反復の幅や形状に差も多いが、1・15などは神宮寺型押型文に似たものである。また楕円文にも小粒のもの、やや大粒のものがあるが、形状は粒がそろって整ったものである。そして施文は横位密接施文と呼ばれる、横方向に間をあげずに原体を回転させて施文しており、表面とともに内面の一部に施文したのも少なくない。

### 石器(第11図)

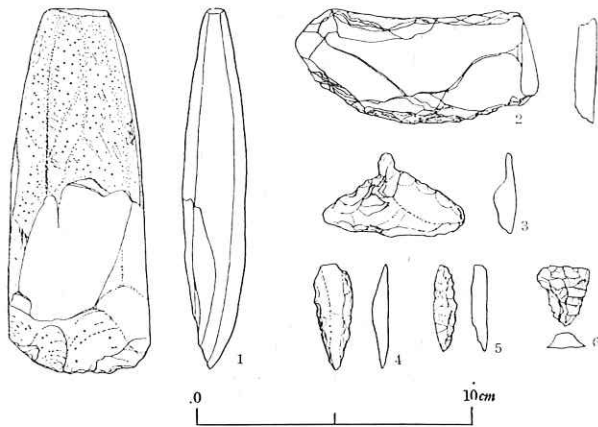
概報に紹介されている六点について述べておくことにする。

1は頁岩製の磨製石斧で、長さ一三・二センチ、幅五・一センチ、厚さ一・四センチ、刃部角三四度を測る。刃部は敲打により再加工されている。

2は大型の横長剥片を用いた両刃削器で、長さ八・八センチ、幅三・九センチ、厚さ七・七ミリを測る。刃部は階段状剝離を用いて刃部を作る。粘板岩質のものである。

3は石匙せきと呼ばれる石器で、横長の三角形の刃部と頂点につまみのつく形態のものである。法量は刃部幅五センチ、長さ三センチ、厚さ七ミリあって、頁岩製である。裏面には自然面を残す。

4・5は尖頭器で、両方とも背面の中央部に主要剝離面を残す。4は横長の剥片を使用し石材はサヌカイトである。長さ三・七五センチ、幅一・四センチ、厚さ五・五ミリを測る。

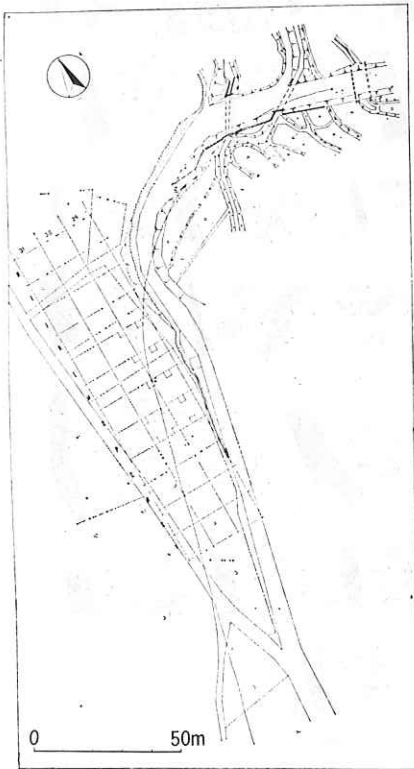


第11図 石 器

5は4と同じくサヌカイト製のもので、長さ三、一五センチ、幅一・一センチ、厚さ五ミリを測る。  
 6はチャート製の石鏃で、押圧剝離を用いている。長さ二・二センチ、幅一・九センチ、厚さ五・八ミリを測る。

(2) 山ノ宮遺跡

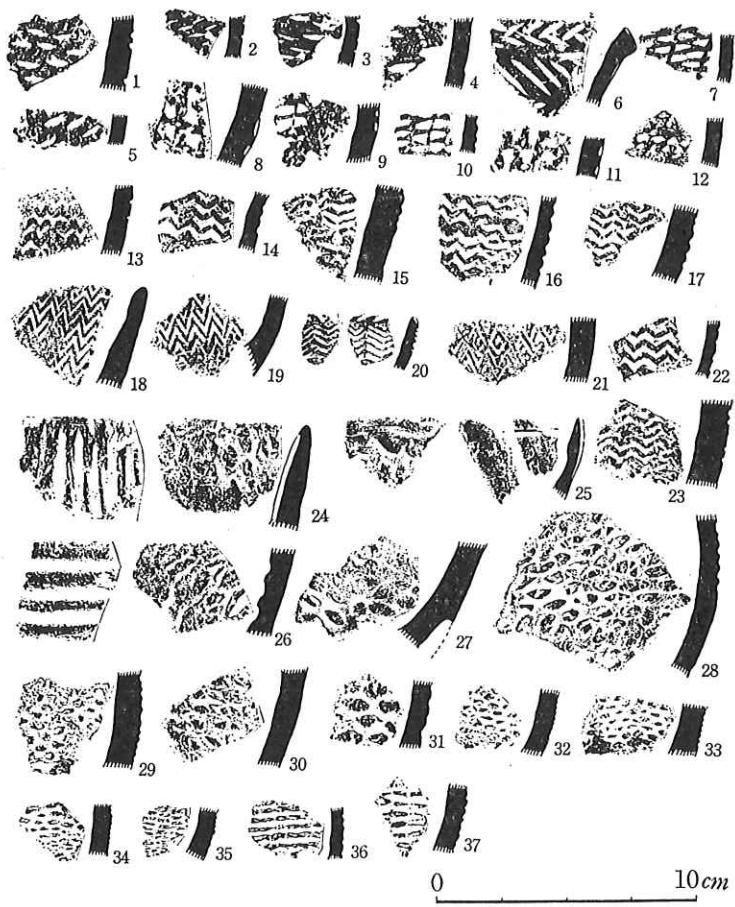
山ノ宮遺跡は、神鍋山の東南東約二キロメートルに位置するブリ山の東側傾斜面にあり、スキー場ゲレンデ付近を第一地点、それから東五〇〇メートルの平坦な丘陵鞍部の第二地点、そして第一地点の東方約四〇〇メートルの舌状に延びた台地縁辺部に位置する第三地点からなる。また、それぞれの地点の標高は、第一地点約三〇〇メートル、第二地点約四〇〇メートル、第三地点は約二五〇メートルを測る。付近にはハンニャ谷に源を発する小河川が、傾斜面の東側の谷部を南へ流れている。そして、昭和四四年、大岡山にゴルフ場を誘致する際、遺跡の一部がゴルフ場進入路上に位置することから、四四年、四五年に第一地点の確認調査が行われたが、遺構・遺物の出土は確認されていない。これは、調査区内にまで遺跡が広がらなかったためで、遺跡が調査地区の北側にあり、ほぼ遺跡の



第12図 山ノ宮遺跡調査地点

南端部を明確にし、第一地点と第三地点の間に無遺構、無遺物の空間があることを意味する。

ここでは、調査成果とともに、神鍋山遺跡同様に、地元の研究者などによって採集された遺物を、『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第二集に報告されたものについて述べることにする。ただし、土器の文様などによる分類は、神鍋山遺跡との関連から、調査報告書の行った分類とは、名称や細



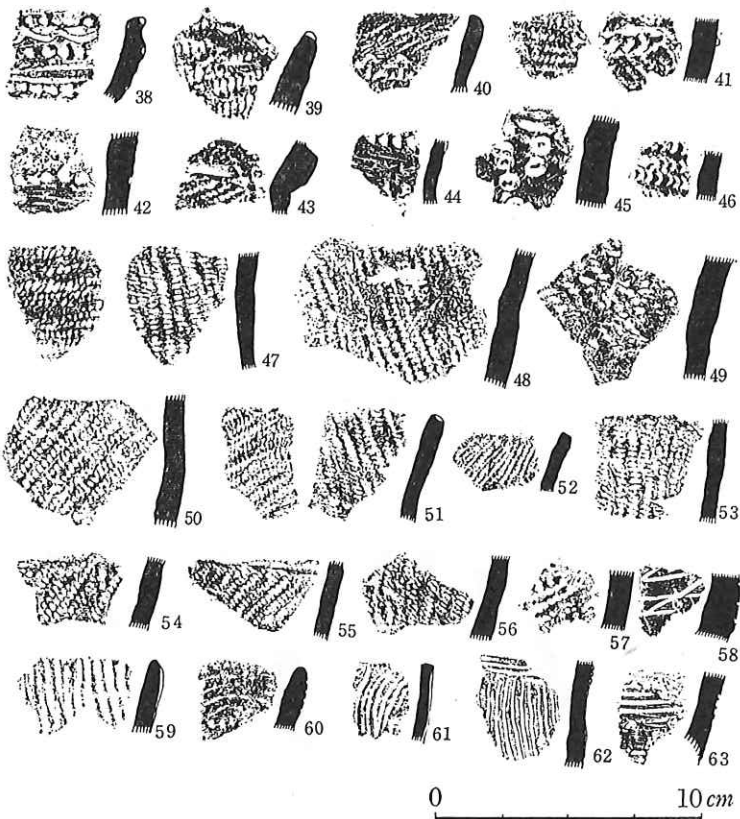
第13図 第1地点出土土器

部の分類の中に若干の違いがある。また、遺物は第一〜第三の地点別に述べることとした。ただし石器類については第一〜第三地点のものをまとめて後で述べる。

第一地点(第13・14図)

第一地点では草創期前半の爪形文から、中期までの各種の土器が出土しているが、細片のものも多いため、各型式の特徴をよく残したものについてのみ解説するにとどめる。

まず爪形文(2・3)としたものは、ヘラ状の工具を用いて施文しているよう



第14図 第1地点出土土器

であるが、細片であるために疑問は残る。続く神宮寺型押型文(1・4と12・20)にも、神鍋山遺跡同様いくつかの文様の差がある。

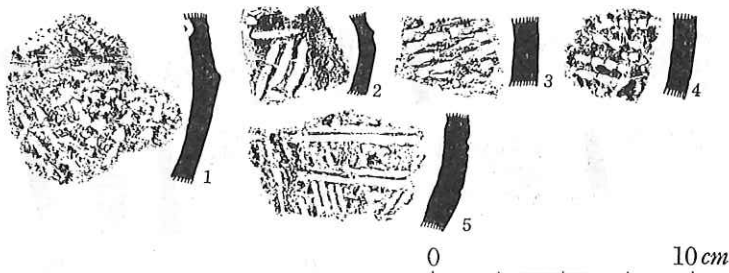
まず1・4は押圧半段ずらしによるもの、5や11などは斜め楕円、縦形楕円のもので神鍋山遺跡にも類例がある。しかしながら、7・10などは台形の沈文が半回転、押圧施文されたことを示すし、20の山形文は一回転一山形の単位の施文が明確に見られ、神宮寺型山形文の特徴をよく残す。また、一般的な押型文は山形文や楕円文が見られるが、神鍋山遺跡には見られない高山寺式(24と28)で、不規則な大形楕円文と口縁内面の巾広の沈線が特徴的である。また前期のものの中に円形の竹管文を施すもの(45)があるが、この様なものは瀬戸内、近畿地方には類例がなく、関東あるいは中部地方の諸磯a式の中に似たものがある。その他、縄文を地文とする土器の多くは撚りの太いもので中期のものと思われる。

### 第二地点(第15図)

図示されたものは五点であり、前期のものと思われ、採集品は総数三〇点ほどで、遺跡の規模も小さいとのことである。

### 第三地点

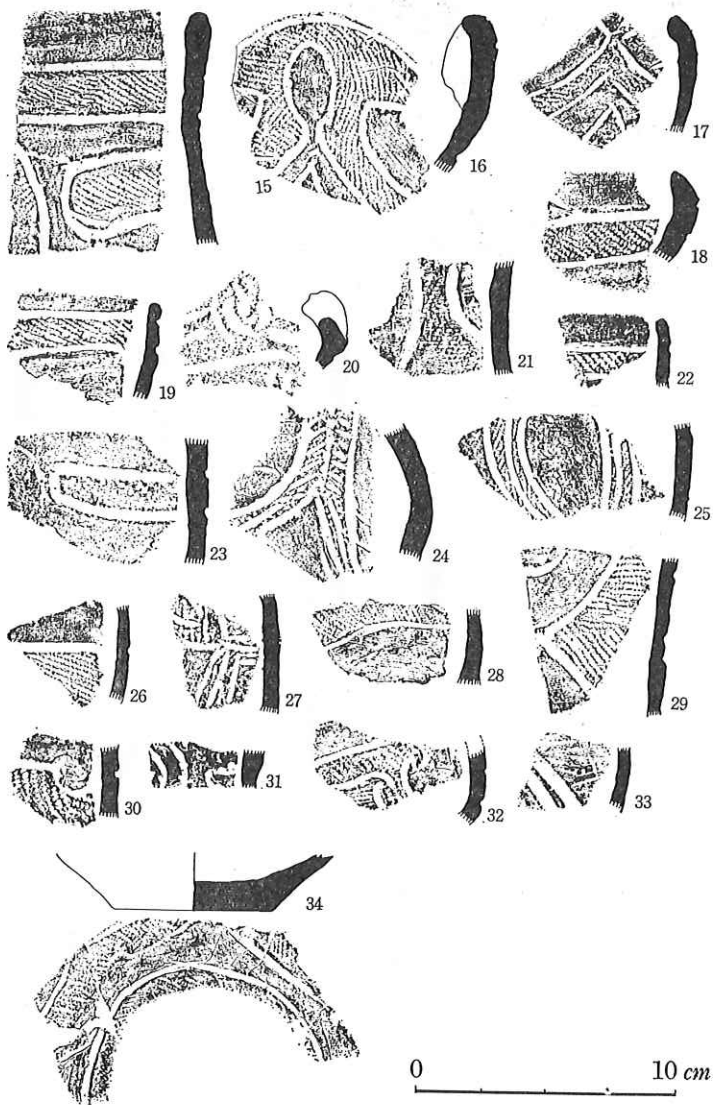
三地点の中で土器の出土が最も多いとされ、時期的にも早期と後期のものが出土している。早期の遺物は高山寺式(1)、小粒の楕円文(2・3)、山形文



第15図 第2地点出土土器



第16图 第3地点出土土器



第17图 第3地点出土土器



(4) がある。そして前期(6・9・11・12・14)のものは、全て表裏に条痕を残し、前半の北白川Ⅰ式あるいは羽島下層Ⅱ式のものと考えられる。また中期のものとしては5・7・10などがあり、5は口縁部の内外面に帯状横方向の斜縄文を施し、船元式の古い様相が見られる。7や10は胴部のもので縄文地文に押引文と刺突を施し、時期的にも5と同じく船元ⅠあるいはⅡ式に含まれると思われる。8・13については時期不明である。

第三地点において特に注意すべきものとして後期の土器をあげておきたい。(第17図)

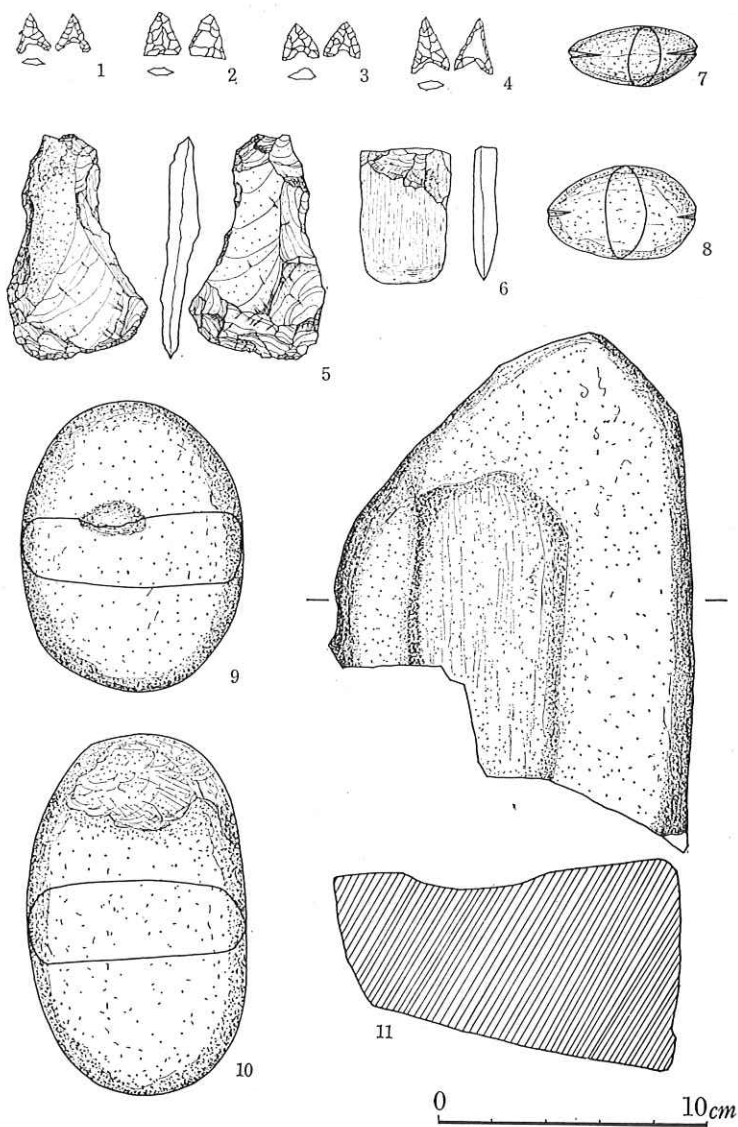
この中で後期初頭の中津式に併行するもの(15・19・21・23・26・28・29)とこれに続く福田KⅡ式に併行するもの(24・25・27)、その他のもの(20・30・33)に分けられる。そして、中津式の中にも口縁部の形態が平縁の15や山形の17、波形の16などがある。ここに紹介したものは磨消縄文の精製深鉢であるが粗製のものもある。また、福田KⅡ式も三本の沈線とその間の磨消縄文によって構成され、福田KⅡ式の特徴がよく残されている。その他のものとして、20は波状口縁頂部に右捻りの突起がある。また20・30・32は沈線末端を曲げて、文様構成に変化をあたえ、より後出のものと思われ、彦崎KⅠ式に属するものかと思われる。そして、31・33は小片であり時期を明らかにすることが難しい。

#### 石器(第18図)

第一地点・第三地点で採集された石器は一点で、他に七〇点をこえる剥片が出土しているとのことである。また、採集された石器はほとんどが第一地点のもので、7・8だけが第三地点出土のものである。

採集された石器は石鏃(1~4)、打製石斧(5)、局部磨製石斧(6)、石錘(7・8)、凹石(9)、敲石(10)、石皿(11)である。

石鏃は全てサヌカイト製で、1・3・4が基部に抉りを持つ凹基式、2が平基式のものである。5は、サヌカ



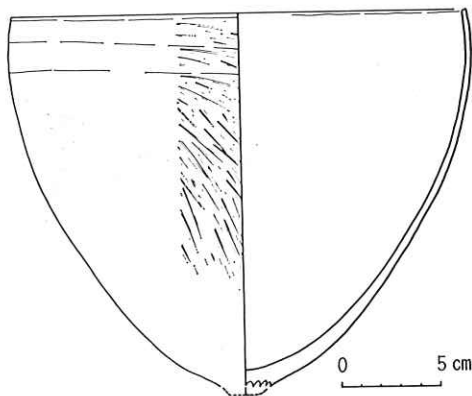
第18图 第3地点出土石器

イト製の撥型ぼちがたの打製石斧で、刃部は階段状剝離によって調整され、全長八・二センチ、幅五・〇センチ、厚さ一・三センチを測る。6は粘板岩製の小形局部磨製石斧で、敲打を加えて原形を作り出したのち、刃部を研磨して作る。7・8は、扁平な河原石の長軸の両端に研磨によって紐かけ溝を作り出している。この形態のものは、中津式に伴出する例が多く、後期前半のものと思われる。9・10はそれぞれ、凹石、敲石としたが、11の石皿とセットをなして、トチ、ドングリなどの堅果類の製粉に用いられたものと思われる。

### (3) 祢布ヶ森東遺跡

祢布ヶ森遺跡については通史上巻において述べられており、これとの重複する部分をさけるため、ここでは昭和四八年〜四九年かけて行われた五次にわたる祢布ヶ森西遺跡と、昭和五〇年に行われた東遺跡の発掘調査の成果をもとに、遺跡の実体について述べることにする。これらの調査の中で検出された遺構の中には縄文時代のものはなく、遺跡を知る手掛りは遺物のみである。そしてまた、発見された遺物の多くは、河川の氾濫はんらんとその再堆積と考えられる砂礫層中より出土している。このことは、本来、遺跡が自然提防上か微高地などの河川の氾濫を受けやすい場所に立地していたためと考えている。

さて、この礫層中から発見された遺物は中期から晩期に至る土器と石器である。まず土器の数量は極めて少なく、中期、後期はその存在を示す程度である。また、晩期のものもこれらを上まわるものの、器



第19図 祢布ヶ森東遺跡出土土器

形や文様を残すものはほとんどない。この中から比較的遺存状態の良いものを図示した(第19・20図)。

19は粗製鉢形土器で、表裏に調整の際の擦痕を残し、口縁部付近にはススが付着している。器壁は非常に薄く仕上げられ、底部は小さい。時期的には晩期中頃の櫃原I式のものと思われる。また20は内面を黒色に研磨された精製浅鉢形土器である。小片であるため全形はわからないが、胴部に段を有し、大きく広い口縁部を持つものと思われる、段上に刻目を施し、段と口縁部の間に孤状の沈線文で飾る精製浅鉢土器で、時期的には櫃原I式のものと思われる。

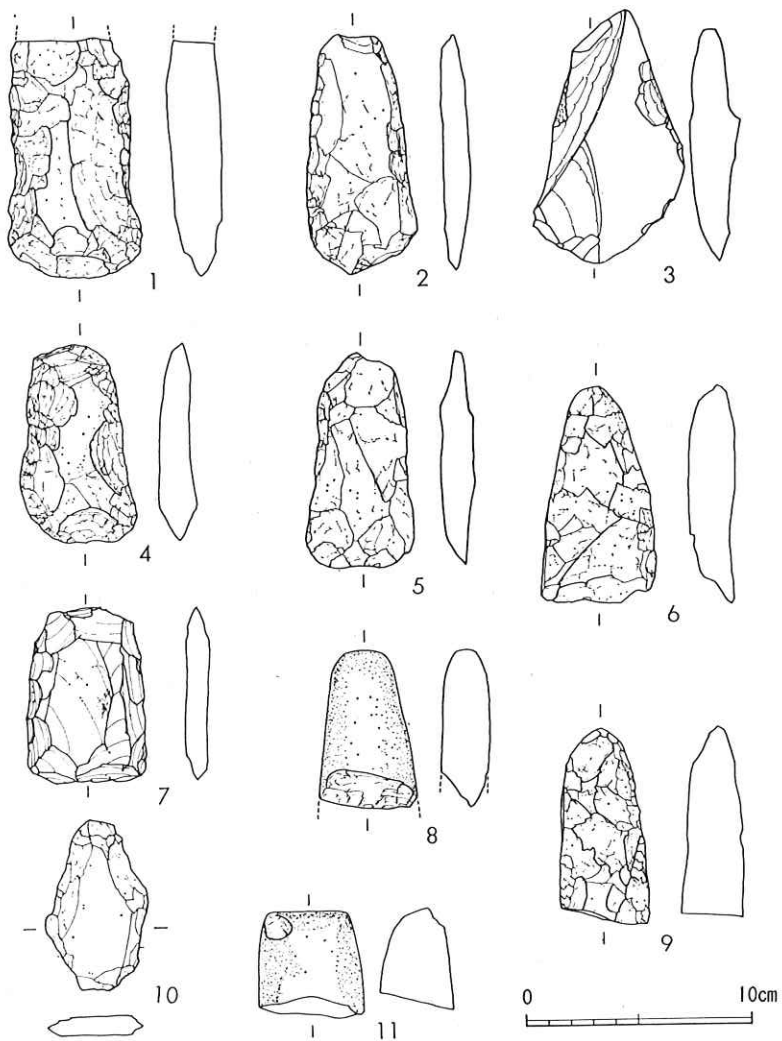
このように土器の出土量は少ないが、石器類は種類も数も多いので、一応、形態の分類を行いながら説明することにする。

(イ) 打製石斧(第21・22・23図)

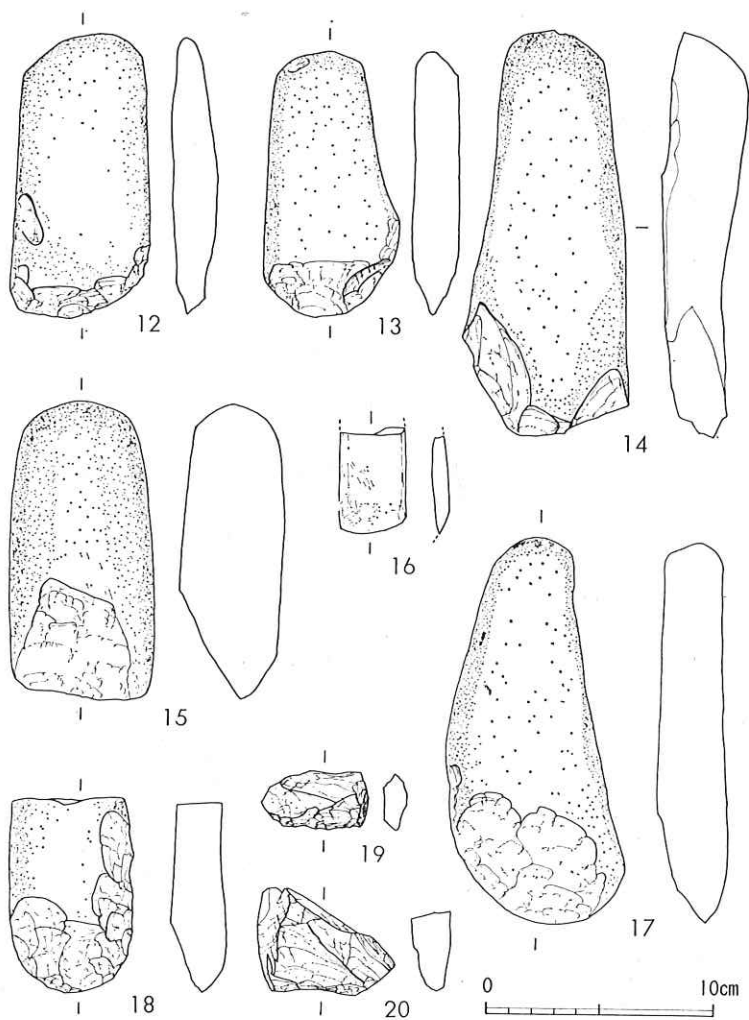
打製石斧は、原材の形状と製作技法により大きく三つに分かれる。それは、粘板岩や片岩などの扁平な大型剥片を用いるA類(1~7)、河原石などの扁平な礫の一部に荒い打撃を加え、刃部を作り出すB類(8・11~14・17・18~24)、安山岩や流紋岩などの緻密で硬質の石材を棒状に加工し、小さな敲打を繰り返して、乳棒状に仕上げたC類(9)となる、さらにA類については形態から撥型ものと短冊型に細分しよう。この中でA類としたものが最も一般的に見られる、土掘り具と考えられる打製石斧で、B類は打製石斧というよりも、早期などに見られる礫器に似たものであり、C類は中期から後期に多く見られる磨製乳棒状石斧の伝統を残している。C



第20図 祢布ヶ森東遺跡出土土器



第21図 祢布ヶ森東遺跡出土石器



第22図 祢布ヶ森東遺跡出土石器

類の刃部はおそらく局部磨製により作り出されていたと思われる。

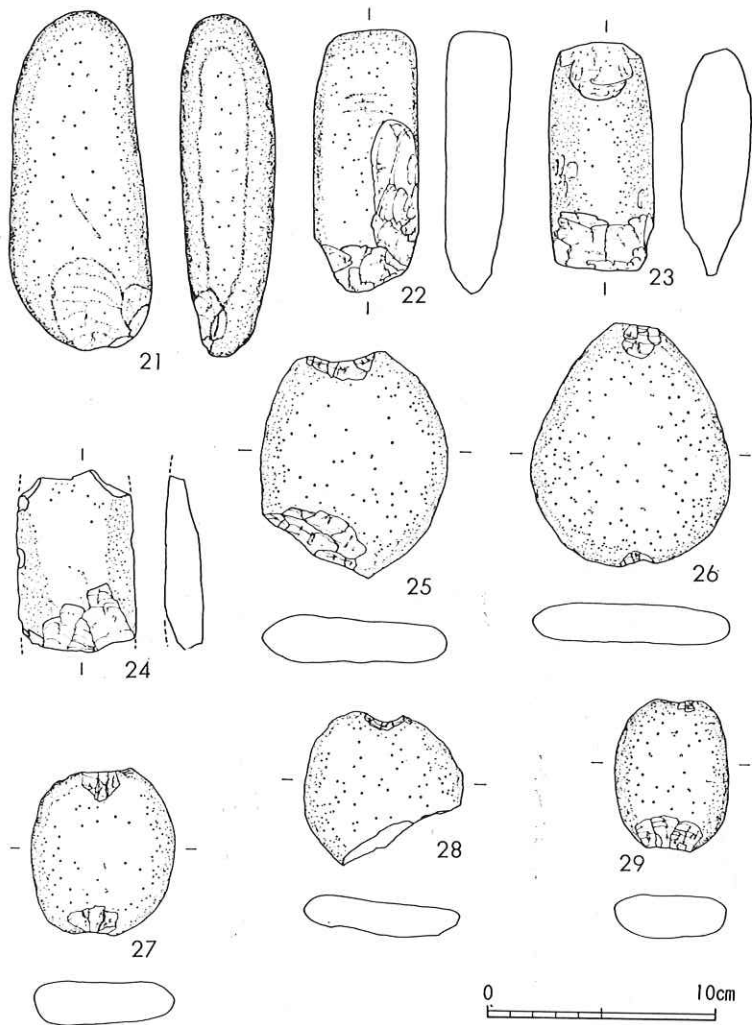
石錘 (第23図25~29)

扁平な砂岩などの河原石の長軸の両端に敲打を加え、打ち砕いて紐かけを作り出している。形態差はないが、十センチをこえる大形のもの(25・26)と六~七センチ位の小形のもの(27~29)に分れる。

礫石器 (第24~26図30~50)

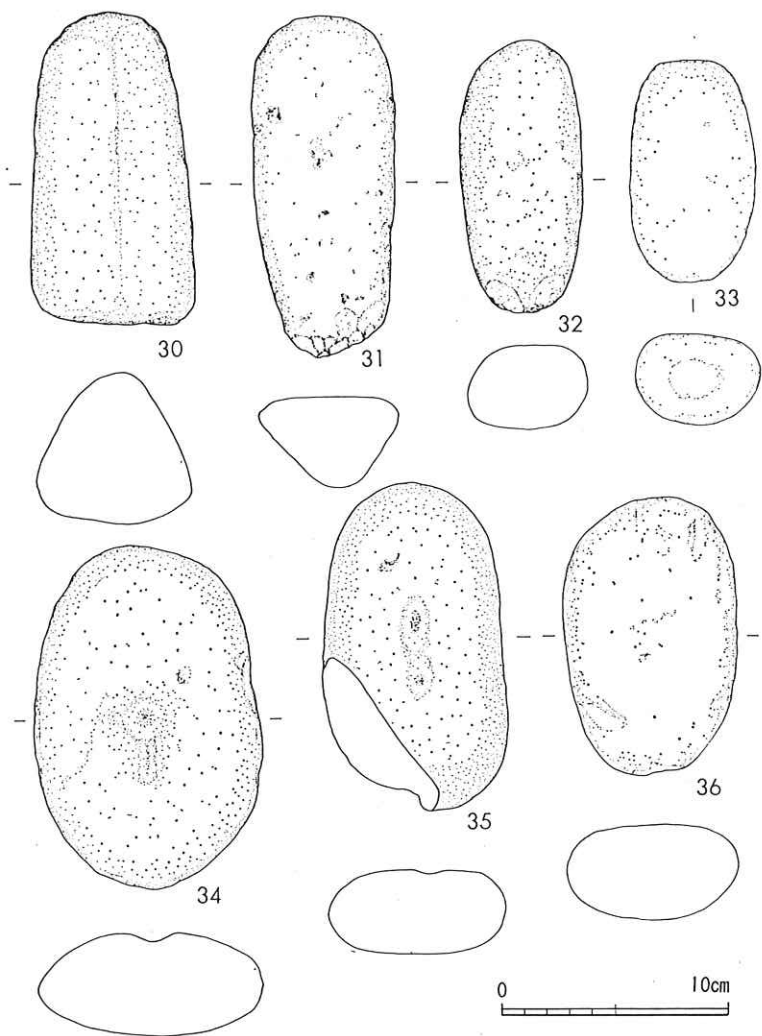
現在まで磨石・凹石・敲石などと分類された石器類の総称として礫石器とした。これは、磨石・凹石・敲石などの分類が非常にあいまいで、その規定が十分でないと考えたからである。このような状況は他の石器が敲打や研磨の分類状況をもとになされており、形態から容易に認定されるのに対して、使用痕の状態によって分類されてきたからである。例えば、凹石は敲打を繰り返すことによって生じた凹みであり、敲石との間にどのような使用方法の差があったかは明らかではないし、どのような物を対称としたか、あるいは、対称物による使用痕の残り方の違いなどについて留意しなければならない。このような状況からこれまでの分類法はここでは使用せず、形態と使用痕をもとに分類を試みたい。

まず、形態から棒状のもの(30~33)、楕円を呈するもの(34~36・42・44・47・49)、円形のもの(37~39・41・45)をそれぞれA型・B型・C型とする。まずA型には30・33のように先端部が使用により明確に面をなすものとそうでない31・32に分れる。またB型も礫面の中央部に使用痕を残し凹部が明瞭な34・35・49と、使用痕が礫面全体に広がり側面の使用を行う36・47・50に分れる。しかしC型では中央部に明瞭な凹みが残るものがほとんどで、側面に打撃痕を残すものは48のみである。ここで分類したものをA<sub>1</sub>型・A<sub>2</sub>型・C<sub>1</sub>型・C<sub>2</sub>型としておく。A<sub>1</sub>型は、先端部が使用のため、平坦になっていることから、トチ、ドングリ、栗などの堅果類をたたきつぶす時

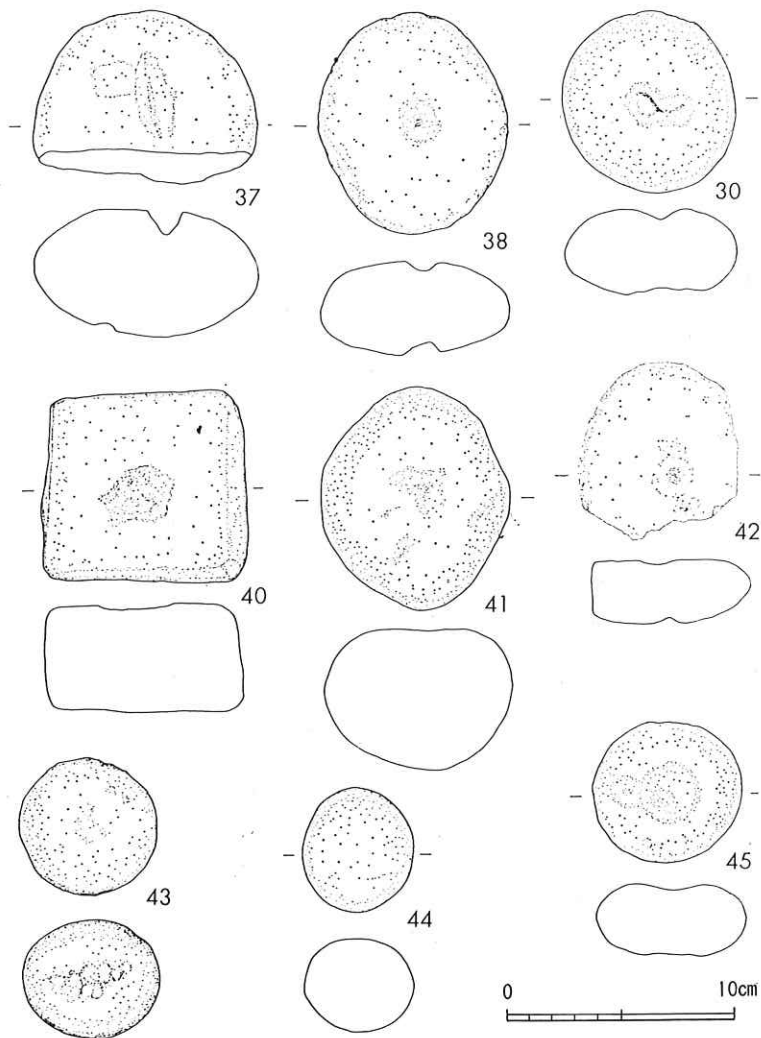


第23図 祢布ヶ森東遺跡出土石器

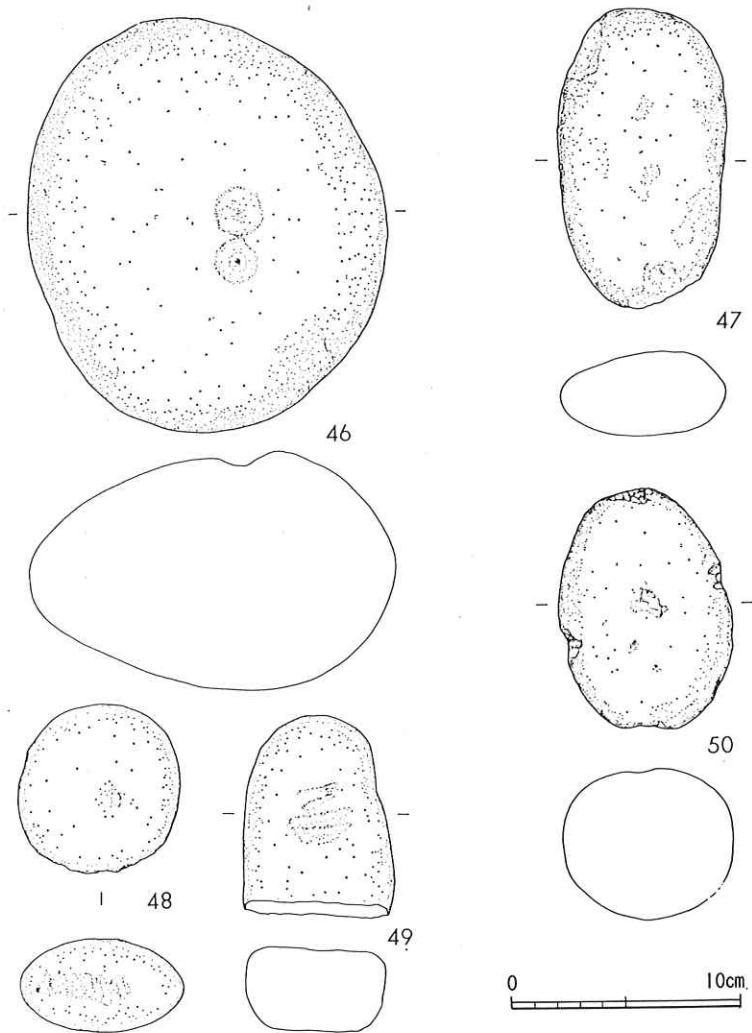




第24図 祢布ヶ森東遺跡出土石器



第25図 衾布ヶ森東遺跡出土石器



第26図 祢布ヶ森東遺跡出土石器

に使用したものと推定される植物加工具と思われる。これに対して、A<sub>2</sub>型は先端部が剝離することから、硬い物に強く敲打をあたえたものと思われ、石器製作時に用いられた石槌（ハンマー・ストーン）と考えられる。B<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>型もほぼ同様の使用方法が考えられる。

また、B<sub>1</sub>・C<sub>1</sub>型は現在まで凹石と呼ばれる一群のものと同形態で、使用法もくるみ割り工具、あるいはやや広義にとらえ堅果類の加工具と考えている。

#### 磨製石斧（第22図15・16）

この二点は形態から見て明らかに弥生時代の、ふとがたまぐりば大型蛤刃石斧（15）とへんべいかたば扁平片刃石斧（16）である。大型蛤刃石斧の刃部に残る剝離面は、意識的な剝離か使用時に残されたものかは不明である。

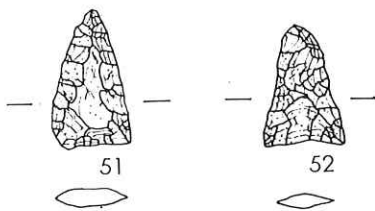
#### 石鏃（第27図51・52）

石鏃は二点ともサヌカイト製のもので51は平基式、52はわずかな抉りのある凹基式のものである。51は縁部に荒い加工を施しただけで中央部には主要剝離面を残している。

これに対して52は丁寧な打撃で調整したものである。

#### 玉原石（第29図1～5）

これは石器ではないが、一応ここで紹介しておく。石材は1～5は緑色を呈する碧玉で6がメノウである。1～5には線状にノミ状の工具によって、V字状に溝を切り込んでおり、その上を加撃することにより、一～三片に原石を分割する。これらのものは、玉製品を作る際の初期の工程を示すものであり、残り屑も含んでいると思わ



第27図 祢布ヶ森東遺跡出土石鏃（2/3）

れる。また、2・3には一部研磨を加えている。6は石材が硬いため、打撃のみで調整を行ったものである。

また、第28図は玉製品の製作に用いられた筋砥石<sup>すじとどし</sup>であり、砂岩製の礫を使用している。これらの分割中の原石と筋砥石は同一地点から出土しており、この付近に玉製品を製作する作業場のあったことを示す。また、技法や伴出する土器より、古墳時代前半頃のものと考えられる。

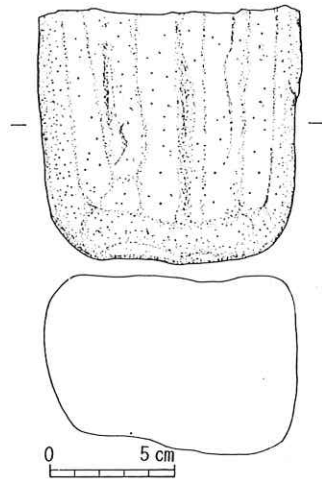
#### (4) 森山遺跡

森山遺跡は知見川と稲葉川によるデルタ地帯に位置し、標高八〇メートルの沖積地上にある。遺跡は昭和四九年度のは場整備中に、地元の研究者によって土器や石器が採集された。出土状況を知るために四ヶ所にグリッドを設け調査が行われた。この発掘調査によって、表土下の黒褐色土層中に遺物を含んでいることが明らかになったが、遺構や遺跡の範囲などについての詳細は不明である。ここでは、この際に採集発見された遺物について述べることにする。

まず、土器は極めて少なく、小破片ばかりでどれも磨耗が激しく遺存状態は悪いが、後期末の宮滝式から晩期中頃のものである。これに対して、石器類の出土数は多く、祢布ヶ森東遺跡と非常に近似した状況を示す。ここでも祢布ヶ森東遺跡の分類にしたがって説明する。

#### 打製石斧(第30図)

森山遺跡では特に祢布ヶ森東遺跡でA型としたものが極めて顕著で、B型は皆無である。また、祢布ヶ森遺跡



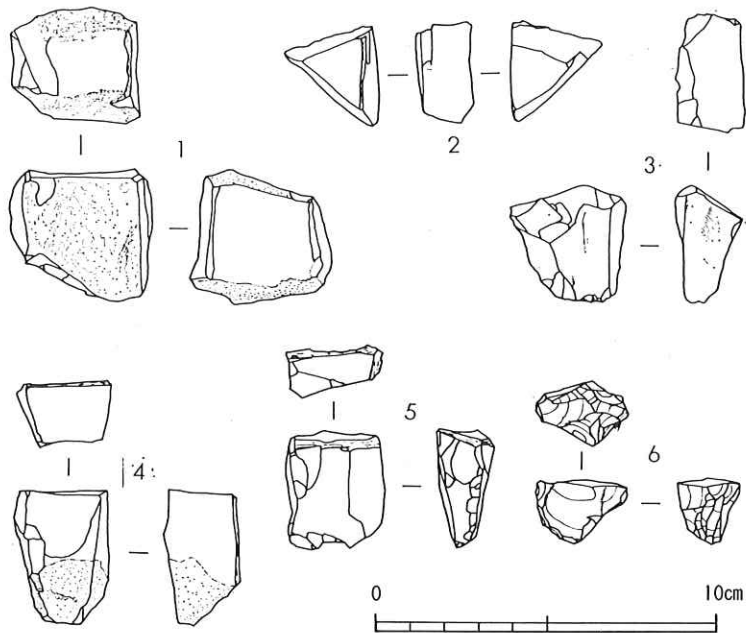
第28図 祢布ヶ森東遺跡出土砥石

同様、撥型（1・6・9・11・12・17・20）と短冊型（7・8・10・13・16・18・19）に分かれる。石材も粘板岩のように板状の節理面を持つものを利用する。これは、容易に板状の原材を得られる特質を利用したものと思われる。

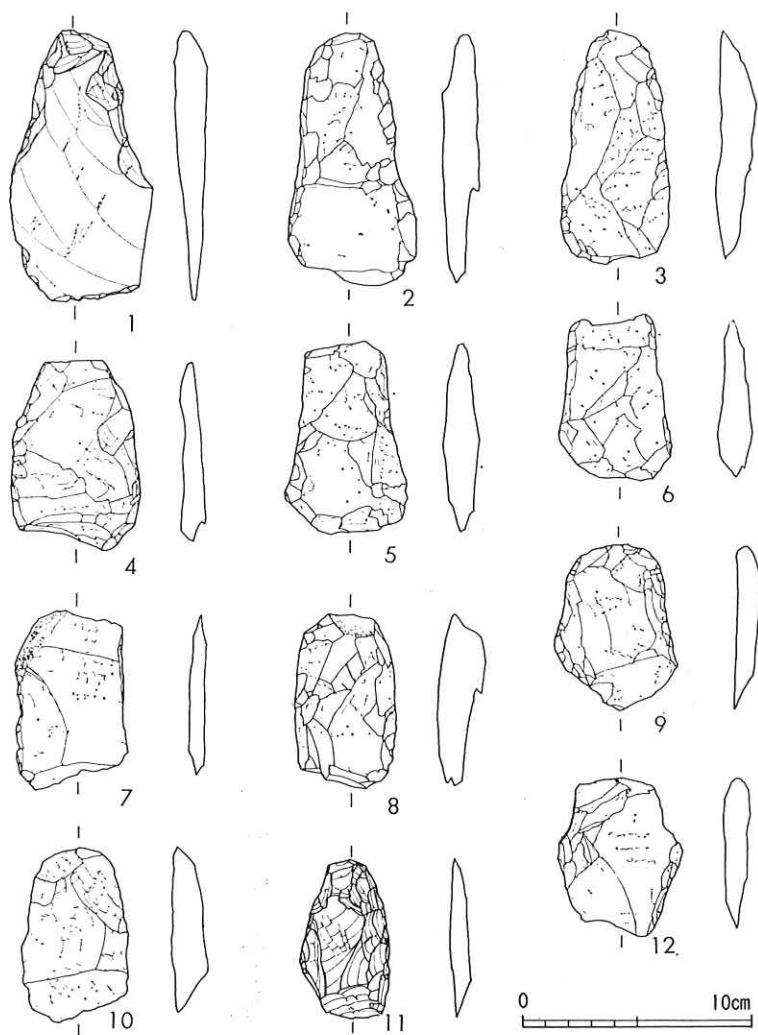
また、C型の敲打製の乳棒状を呈するもの（33）も出土している。

削器（第31図21～31）

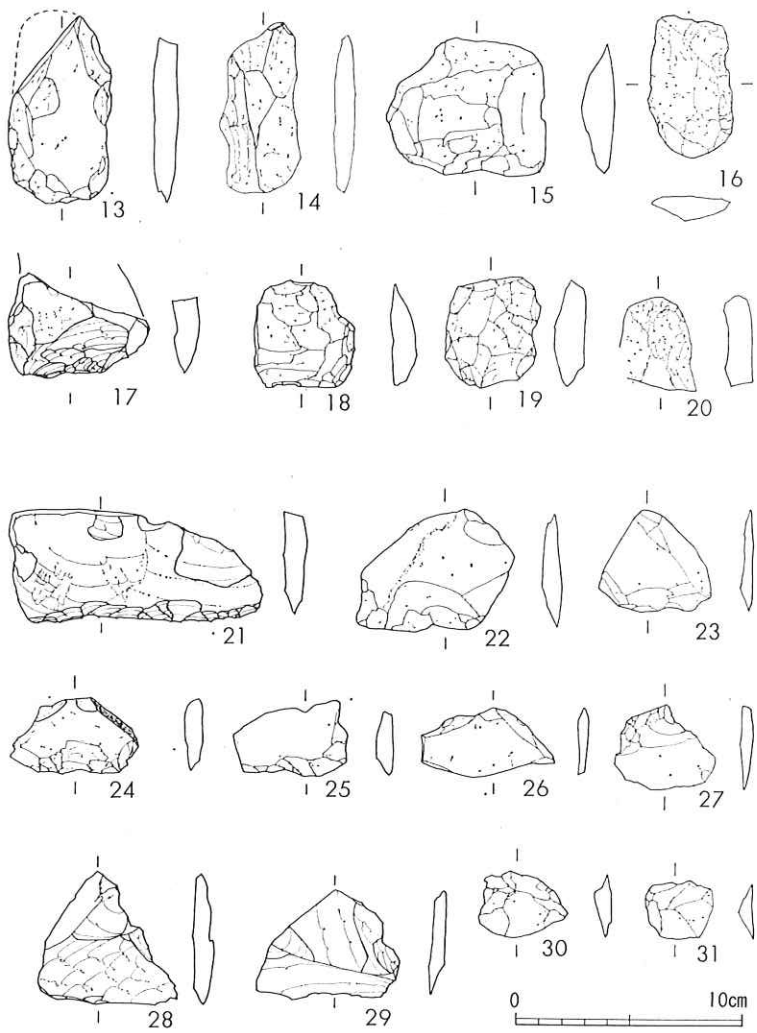
削器は、剥片に生じた鋭利な部分をそのまま使用するもの（26～29）と一片に丁寧な打撃による調整を加えたもの（21～25）がある。また形態的には二次加工が非常に少ないため、あまりが無く不定形である。そのため剥片製作技法の観察については好都合である。多くの場合、打面調整は行われず、平坦な自然面あるいは、剥離面に打撃を加えて行っており、方向性または、規則性は認められない。石材はサヌカイトの他、粘板岩がある。



第29図 祢布ヶ森東遺跡出土玉未製品

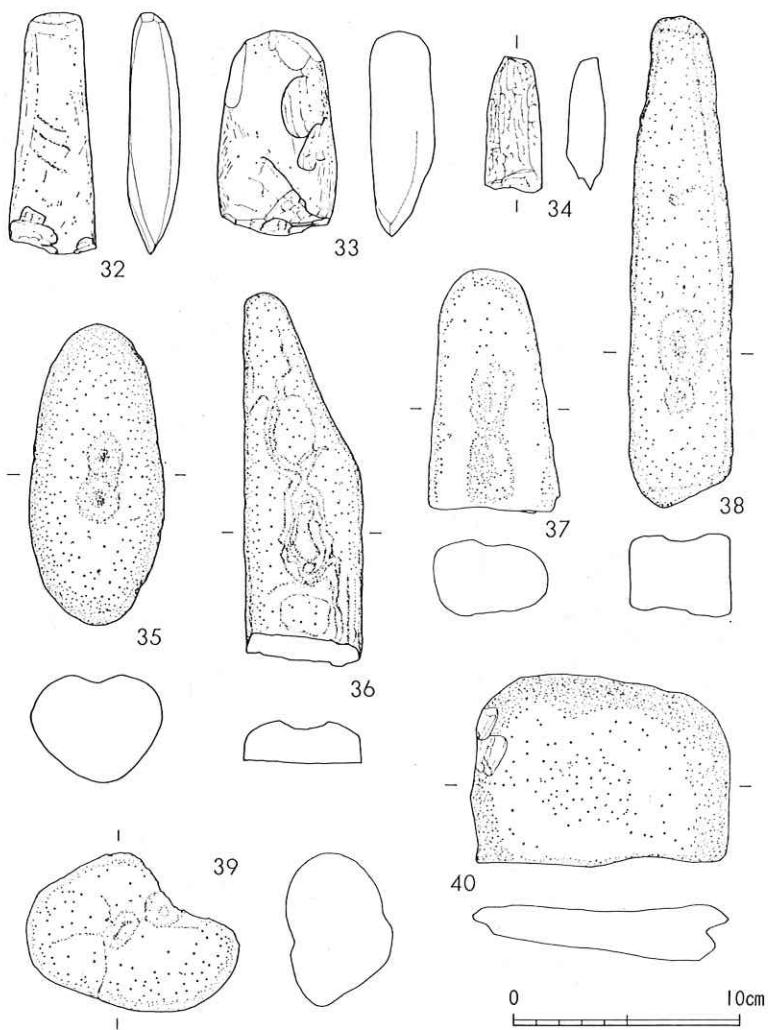


第30図 森山遺跡出土石器



第31図 森山遺跡出土石器





第32图 森山遺跡出土石器

磨製石斧(31・32)

方柱状(31)と太型蛤刃状(32)のものがあり、両方とも両刃である。あらかじめ敲打により外形を作ったのち研磨によって調整されたらしく、凹部に剝離痕が見られる。

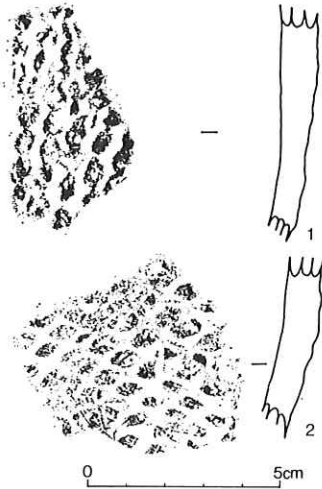
礫石器(34~38)

祢布ヶ森東遺跡で見られたような、多くの形態差はなく、ほとんどB<sub>2</sub>型とした中央部に凹みの見られるものか、その亜形と思われる方柱状のものである。これらも堅果類などの植物加工具と考えられる。

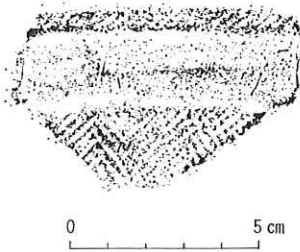
(5) 水上遺跡

水上遺跡は、祢布ヶ森東遺跡の東北約一キロメートル程の丘陵末端に位置し、円山川西岸の低湿地をのぞむ位置にある。

出土した遺物は前期・後期・晩期のもののほか、最近地元の研究者によって押型文土器も採集されており、早期にも人々が低湿地に生活していたことを示している。この土器は押型文終末期の高山寺式で、粗大な楕円文と内面の斜行沈



第33図 水上遺跡出土土器



第34図 水上遺跡出土土器

線文が認められる(第33図)。

また、第34図は、後期中葉の津雲A式に併行するもので、口縁部と胴部下半に縄を縦横にころがして、疑似羽状縄文を施した、小形鉢型土器である。

(6) 姫谷遺跡

姫谷遺跡は、昭和五三年には場整備事業の工事中多量の木製品、土器等が見つかり発見された遺跡である。

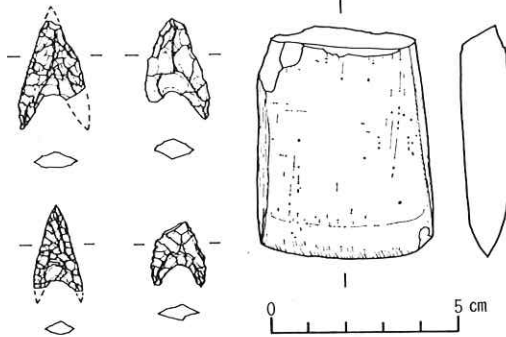
出土した遺物の大半は、後章でも述べるが、奈良時代から平安時代のものであり、縄文時代の遺物は、けつじょうみかきり 玦状耳飾のみである(第35図)。

玦状耳飾の採集地点はC地点で(第146図)、周囲はブルドーザで表土を剝ぎとっており、採集地点周辺に埋蔵されていたものか、別の地点に埋蔵されていたものが工事によって採集地点まで運ばれたものかは不明である。なお、周辺をよく観察したが、他に縄文時代の遺物は認められなかった。

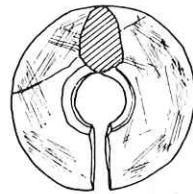
この玦状耳飾は、直径三・九センチ、厚さ〇・九センチ、中央孔径一・〇センチを計る。また、一個所に幅〇・二センチの切り込みがつけられている。表裏とも丁寧に磨かれ、色調は乳白色を呈している。石材は未調査のため、不明である。

(7) 伊府遺跡

伊府遺跡は日高町域のほぼ中央伊府に位置し、円山川の支流である稲葉



第36図 伊府遺跡出土石器



第35図 姫谷遺跡  
出土玦状耳飾(2/3)

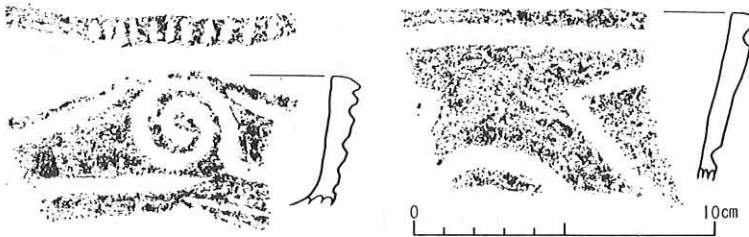
川左岸、約六二メートルの低位段丘上にある。伊府集落およびその北東部付近が遺跡の範囲であろう。

本遺跡の調査は昭和五一年一月、県営は場整備事業に先だって行われた分布調査の結果にもとづき、稲葉川左岸から県道てらま耀山日高線に至る、約一〇万平方メートルの範囲について遺跡確認調査を実施した。

調査の結果、小字コモイケ付近より、先土器時代～古墳時代に至る遺物が出土した。これらの遺物の中で、先土器時代、縄文時代草創期の遺物は、13グリッドV層の黄褐色粘質土層、VI層の暗灰茶褐色粘質土層などから検出された。先土器時代・縄文時代の遺物には彫器・尖頭器・局部磨製石斧・石鏃・スクレイパー・磨製石斧等が出土している。縄文時代後期の遺物は5グリッドII層・暗茶褐色土層、III層・灰褐色土層より多数の土器および石器が出土している。これらはいずれも縄文時代後期初頭から中期のものであると思われる。

弥生時代の遺構としては、34グリッドにおいて黒褐色粘質土の溝状遺構が検出され、ヘラガキ沈線文を有する弥生時代前期の壺形土器および弥生時代中期の土器も出土している。

以上のように、広大な調査対象地に各種の遺構・遺物が確認された。特にこの中において、伊府集落の北東部、小字コモイケ付近に所在する、高垣の台地南から北西方向へ長さ一二〇メートル、幅約四〇～五〇メートルの範囲に、先土器から縄文、弥

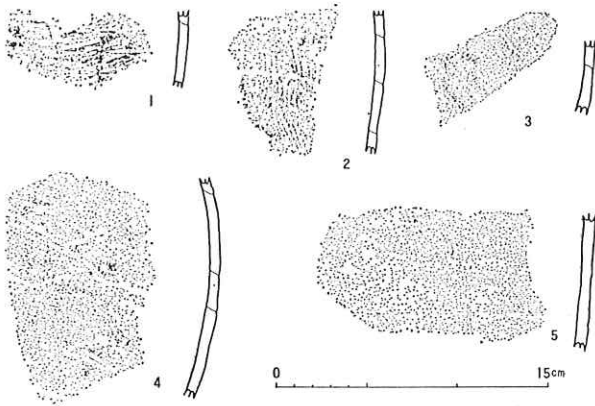


第37図 伊府遺跡出土土器

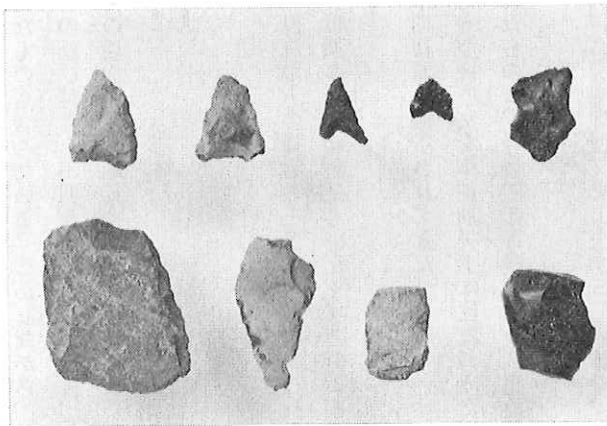
生、古墳時代、あるいはそれ以後にもおよぶ複合遺跡の存在が予想される。また本遺跡は但馬地方における文化の発生・発展段階を知るうえにおいて極めて重要な遺跡であろう。

(8) その他の遺跡

先に述べた七遺跡の他に、祢布ヶ森西・焼ヶ辻・前田の諸遺跡がある。この内、祢布ヶ森西・焼ヶ辻遺跡は晩期、前田遺跡(頃垣字柄戸端)は早期のものである。また前田遺跡は溶岩流上の台地に位置し、焼ヶ辻遺跡は祢布ヶ森東遺跡に隣接した低湿地に立地する。以上のように町内の各遺跡の状況と出土遺物の紹介を行ってきたが、この中で使用した資料の多くは、各遺跡の発掘調査によって出土したものを中心にし



第38図 祢布ヶ森西遺跡出土土器



第39図 前田遺跡出土石器・剝片

先に述べた七遺跡の他に、祢布ヶ森西・焼ヶ辻・前田の諸遺跡がある。この内、祢布ヶ森西・焼ヶ辻遺跡は晩

てきた。多くの遺物の中には当地方の縄文文化を理解するうえで重要なものも含んでいる。しかしながら、神鍋山遺跡などの一部のものをのぞいた大多数は、層位的関係や各遺構との結び付きも不明な点が多い。今後、分布調査や発掘調査が行われる中で、新たな遺跡や遺物が発見され、資料の増加が予想されよう。

#### 第四節 但馬の縄文文化とその環境

##### 草創期

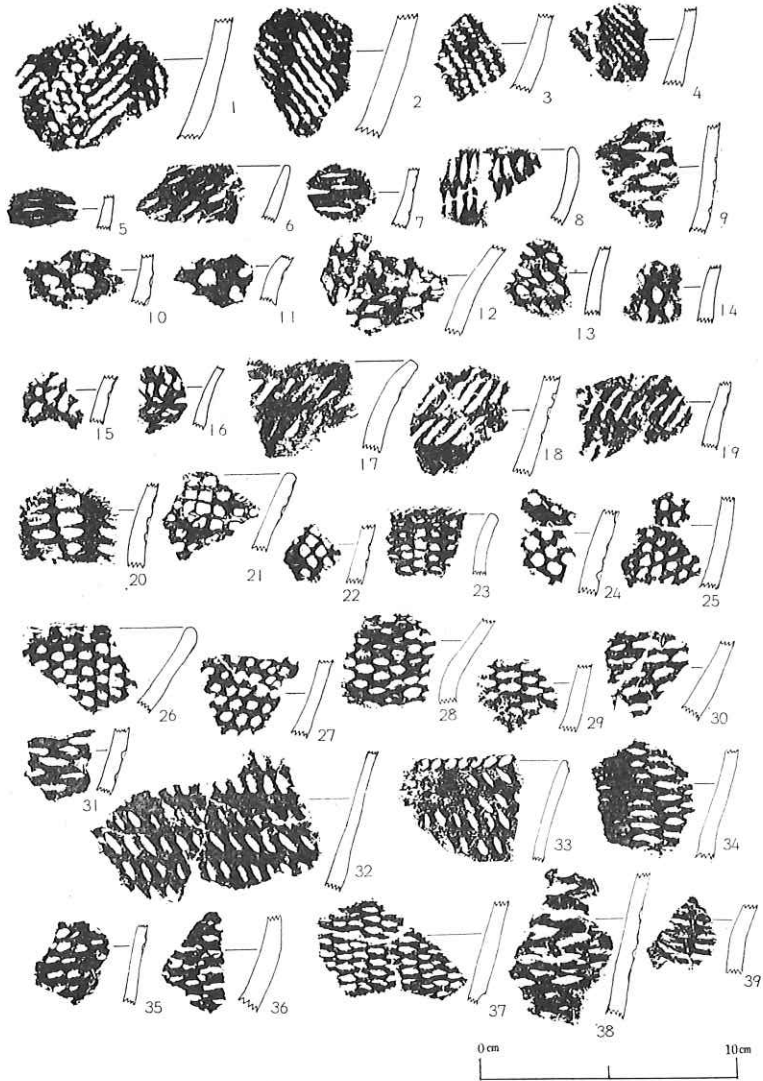
草創期の遺物は大屋町上山高原において採集された細隆文土器が、但馬地方の最古の土器といえる。これに続く爪形文土器が、山ノ宮、神鍋山遺跡で採集されている。これらの前半期の遺物は数量も少なく、どのような石器を伴っているのか明確ではない。

これに続くと考えられる神宮寺型押型文は、現在まで一般的には早期初頭に編年されてきた。

ここでは、編年の一応確立された関東地方<sup>⑧</sup>の編年と対比して、神宮寺型押型文を草創期後半に位置づけた。しかし、この問題は現状の草創期区分やその概念の不十分さから生まれたもので、今後回転押型文との関連性などを含めた総合的な再検討を加えなければならない。

そうした状況の中で、但馬地方では神鍋山・関町別宮家野遺跡が神宮寺型押型文を出土する二遺跡で、発掘調査がなされている。

両遺跡での調査成果は調査報告書として公開されているが、その中では両遺跡とも回転押型文と共に出土している。この状況を本来的な共件事実とするか複数の時期的な重複と見なすかは、出土状況からは明確にすることができない。しかしながら、神鍋山遺跡の各地点では、神宮寺型押型文と回転押型文が別個に採集されている地



第40図 関宮町別宮家野遺跡出土土器

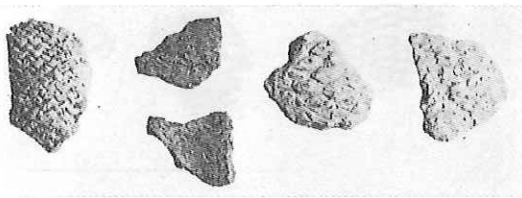
点もある。現在までのところ、神宮寺型押型文の分布範囲は中部地方から近畿地方で、今後ややその範囲を広げる可能性はあるが、現状を大きく変更することはないと思う。こうした状況は、但馬地方とそれらの地域との密接な関連性を指摘できるし、また、その西端部の状況を示すものといえる。

### 早期

但馬地方での早期の遺跡は、草創期から前期への発展過程の中間状況を呈し、遺跡も草創期から継続するもの、新しく出現するものなどがあり、前者の代表的なものとして神鍋山遺跡、後者のものとして関宮町杉ヶ沢遺跡をあげることができる。この二遺跡は、その後にくつ前期から晩期までの遺物が採集され、その量からも、中心的な遺跡または主要拠点と見ることができ。また、水上遺跡や焼ヶ辻遺跡などの低湿地にも遺跡が出現する。

そして、これらの遺跡から採集された遺物は、楕円文・山形文を始めとする回転押型文が多い。また、施文は横位密接施文のものが多く、帯状施文のものはないようである。押型文の分布は関東の一部から九州まで広く分布し、細部における差異は認められるが、基本的には同質のものである。但馬地方の場合も、広い西日本、特に隣接する、山陰、北陸、瀬戸内地方との関連のもとに成立したものと思われる。

こうした回転押型文に代表される早期前半には多くの遺跡が発見されているのに対し、条痕文系の後半のものは出土例が比較的少く、内容についても不明な点が多い。しかし、北陸地方や山陰地方では条痕文の他、縄文で飾られる平底の土器が出土していることから、但馬地方でも、これらの裏日本地域と同一の文化圏の中に含まれていたと考



第41図 関宮町杉ヶ沢遺跡第16地点出土土器



えられる。

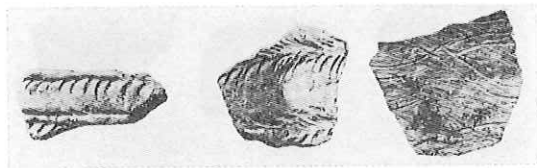
## 前期

前期には但馬地方の遺跡分布は一つの頂点を示す。また土器の形態にも変化がみられる。それは土器の平底化が進み貯蔵に適した形を示している。生活は食物の貯蔵によって、より安定したものへと発展したものとされる。そして、貯蔵の発展は神鍋山遺跡の貯蔵穴へと受けつがれて行くのである。

こうした時代に残された土器は近畿地方の北白川式、あるいは瀬戸内地方との強い関連性を示し、爪形文や羽状縄文などによって飾られている。またこれらの地域の他に、九州の曾畑式に類似するものが、神鍋山や村岡町小伝次遺跡などから出土している。また円形竹管文、コンパス文など関東の諸磯式もろいそや黒浜式との関連性を持つ文様のものが出土している。これらのものは、直接それらの地域と交流を行ったとも考えられるが、山陰地方や中部・北陸の各地との媒介によってもたらされたものと思われる。

## 中期

縄文時代も中期に入るとより充実したものとなり、中部地方などでは、尾根上に集落が営まれ、原始的な農耕、あるいは栗園管理などの集団労働が成立、活発化するといわれている。しかしながら、但馬地方ではこれらの地域の状況とは反対に遺跡は減少する傾向がある。こうした状況は汎西日本の状態である。また採集される土器は瀬戸内、近畿地方に広く分布する船元式、それに続く里木式とのやなぎのもので、外野柳遺跡などで出土しておりこれらの地域との関連性を指摘できる。



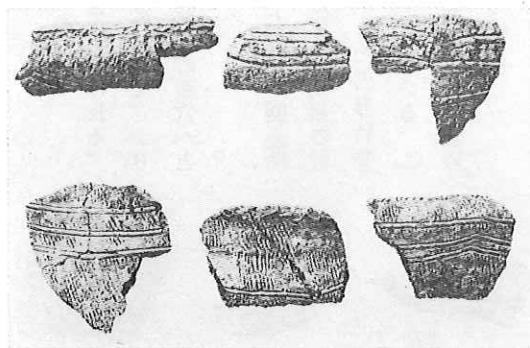
第42図 前期の土器（関宮町ハチ高原遺跡出土）

## 後 期

後期になると、土器は磨消縄文により飾られる精製土器と、貝殻条痕文の粗製土器に分化が顕著になる。こうした、土器文様の有無は、土器の機能の多様化を反映したもので、粗製のものは主として煮沸用に、精製のものは貯蔵用と、機能の差を表わしたものと考えられる。

また遺跡立地もそれ以前（草創期～中期）の遺跡が、尾根上あるいは台地上に形成されたものが多かったのに対し、西日本各地では、沖積地（低湿地）へ進出するとの見解が出されている。但馬地方においても豊岡市中谷貝塚や同市荒原貝塚などが出現し、こうした、汎西日本的な変化と同様の方向性が認められる。そして、これらの人々の使用していた土器は、中津式や福田Ⅱ式などの磨消縄文を主体としたもののほか、浜坂町池ヶ平遺跡<sup>な</sup>などで見られる渦巻文の池ヶ平式土器である。この池ヶ平式土器は、現状では但馬地方にのみ出土しており、中津式、福田式+池ヶ平式によって、但馬地方の後期前半の様式を形成している。また、池ヶ平式は文様構成から北陸地方の気屋式との関連性も指摘されている。

これに続く後期中葉の遺物は量的に少なく様相も不明確であるが、京都府舞鶴市桑飼下遺跡では、瀬戸内の津雲式や関東地方の加曾利B式などに類似し、東西の折中の桑飼下様式が提唱されている。おそらく但馬においてもこの状態に近い様相を持つものと思われる。



第43図 関宮町外野柳遺跡出土土器

これに続く、元住吉山・宮滝式などの凹線文土器群は、森山遺跡・関宮町杉ヶ沢遺跡などで出土しているが、数、質的にも不足気味で正確な把握は困難な状態である。

### 晩期

但馬地方における晩期の遺跡は、数量的にも質的にも後期同様極めて不明な点が多い。しかしほぼすべての型式のものが断続することなく出土しているようである。そして後期に始まる遺跡の立地が高地から低地へと移動する傾向が一層顕著に現れ、水上・祢布ヶ森東・森山遺跡などの町内の低地遺跡の多くはこの時期に発展した遺跡である。こうした低湿地への遺跡の進出を、農耕の成立と結び付けた説が出されている。

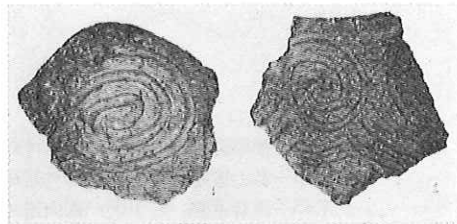
この場合立地とともに注目される遺物に、祢布ヶ森東・森山遺跡などで出土している打製石斧があり、主要な耕具と考えられている。ただ肯定する説も多いが、否定説も少なくない。農耕の出現は日本の歴史を理解するうえで重要な問題であり、その発生

によって起った社会変化はそれまで農耕を知らず、採集を唯一の糧としていた文化を飛躍的に変化させたと考えられる。現状では水稲などの農耕の開始は弥生時代に南朝鮮から伝来された技術と理解する方が妥当である。

以上のように現在の但馬地方の出土遺物や遺跡分布を各時期別に概況を述べてきたが、最後にこれらをとらえた自然環境と彼らの生活などについて、少し述べておくことにする。

まず、現在の但馬地方は裏日本的な気候区に位置し、冬期には一メートルを越す積雪もある。

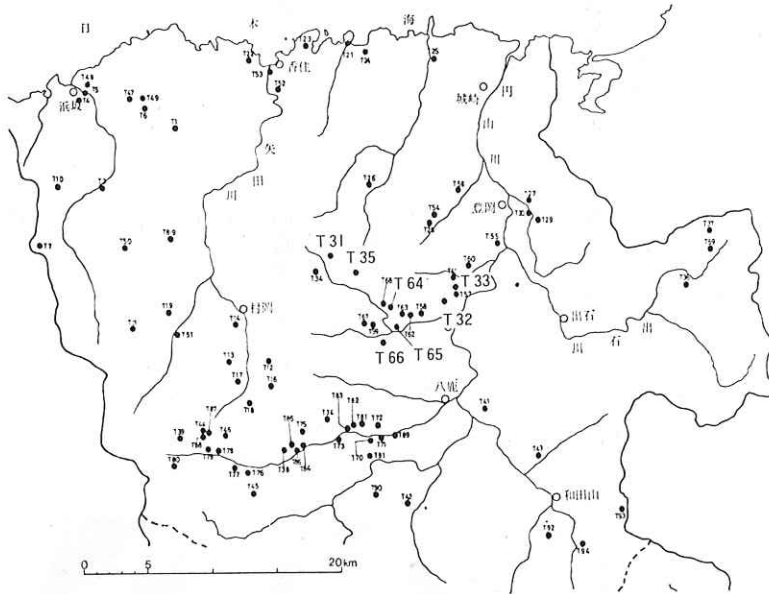
縄文時代には、草創期から中期までの優温期と後期に始まる減温期があり、それに伴う植物相や動物相の変化があったと考えられる。



第44図 浜坂町池ヶ平遺跡出土土器

まず優温期には極地の氷河がとけ、海水面が上昇する海進が起き、そのピークに達した前期には現海面より一〇メートル以上も上昇たとされている。しかしながら、福井県鳥浜貝塚や山陰地方などの海岸部には、標高三〜五メートルの地点に前期の貝塚が残され、この縄文大海進に疑問が生じている。

次に、但馬地方の遺跡の多くが、特に草創期から前期の遺跡は標高三〇〇メートルを越える高地に位置することから、植物性食料への強い依存傾向が認められる。これは、堅果類の森林限界と合わせて説明され、強い説得力を持つものである。ただし、彼らの生活の基



- |           |              |
|-----------|--------------|
| T 31—神鍋遺跡 | T 32—祢布ヶ森東遺跡 |
| T 33—水上遺跡 | T 35—山ノ宮遺跡   |
| T 65—伊府遺跡 | T 64—姫谷遺跡    |
| T 66—森山遺跡 |              |

第45図 但馬の縄文遺跡分布図

礎は、季節的な移動と定住であったと考えるのが一般的であるから、但馬山岳地域で見られるこうした状況は、年間を通じて行われたものではなく、一定の期間あるいは季節の行動の一つの様相と把握すべきものである。現在のところ、但馬地方海岸部での草創期と前期の遺跡の発見例はなく、山岳地域の様相に対応するものは確認されていない。北陸地方や山陰地方には貝塚を形成する様相が明らかであるから、これらの人々はある季節には山岳部で木ノ実の採集や狩獣を、ある時は海岸部で貝の採集や漁撈を行ったのであろう。

これに続く後晩期の但馬地方における遺跡の減少については、一般的に減温期に入り植物相や動物相の変化が起こり、高地からより温い低地へ人々が移動したとする考えがある。また海進が終り海退現象によって新しく出現した低湿地に、生活の場を移したなどと説明されている。しかし現在の考古学資料を検討してみると、こうした現象が起こった事実を認めることはできるが、原因についてはなお不明といわざるを得ない。そして、縄文時代全期間を通じて但馬地方は本州西半部という大きな地区の中に位置し、ほぼ同一の変遷をたどる。こうした状況を細部にわたり検討し、その独自性を理解するために、現在までの資料の整理と今後の発掘調査の成果に期待したい。

〔注〕

① 大森貝塚 東京都大田区大森の多摩川デルタ東端にある、縄文時代後期の貝塚。明治一〇年、E・S・モースによって日本で初めての発掘調査がなされ、同一二年、調査報告『SHELL, MOUNDS OF OMORI』が出されている。

② アイヌ人説 小金井良精などにより、縄文文化を残した人々は現在北海道に住むアイヌ人の祖先と考えられた。小金井良精『人類学研究』大正一五年

③ コロボツクル人 坪井正五郎により、縄文人はアイヌの伝説上の人種、コロボツクル人であるとの説。

- ④ 層位論 遺物を包含する土層の上下関係によって、遺物の先後を決定する方法。
- ⑤ 施文原体 土器の文様を施す際に用いられたもの、縄文の場合は縄が、押型文の場合は、彫刻された円棒などが原体である。
- ⑥ 自然科学の方法論 ここでは自然科学の年代測定を、考古学遺物の絶対年代を測る時に用いたもので、同位元素 ( $C_{14}$ ) の測定・黒曜石水和層の測定などをさす。
- ⑦ 夏島貝塚 神奈川県横須賀市夏島にある、縄文時代早期～前期の貝塚。昭和二五年明治大学によって発掘され、早期～前期の各型式が層位的に出土している。杉原莊介・芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告考古学第二冊』昭和三二年
- ⑧ 貝殻の  $C_{14}$  生物は生きている間大気中の  $C_{14}$  を体内に一定量含んでいるが、死ぬと  $C_{14}$  は一定の速度 (五七三〇年) で半減する。これを測定することにより、絶体年代をもとめる。
- ⑨ 一万年前の見解 隆起線文の年代は、 $C_{14}$  測定法で  $B \cdot P$  二四〇〇±三五〇年と、 $B \cdot P$  二七〇〇±五〇〇年、泉福寺遺跡の豆粒文が、フィッシュトラック法によって  $B \cdot P$  一〇八〇〇±四五〇年、隆起線文土器が  $B \cdot P$  九八〇〇年と出ていることから、土器の出現を二二〇〇〇～一〇〇〇〇年の間に出現しているとの見解である。
- ⑩ 新しい自然科学による研究方法 ここでは、主としてフィッシュトラック法 (原子核飛沫法) をさす。この方法は石器などの表面に見られる原子核のきずの中を、電子顕微鏡などを用いて測定年代を算出する。この他熱ルミネセンス法なども応用される。
- ⑪ 泉福寺洞穴 長崎県佐世保市にある、縄文時代草創期から早期にいたる洞穴遺跡。昭和四五年から麻生優氏が調査を行い、豆粒文から隆起線文、爪形文などの草創期の土器が層位的に出土している。
- ⑫ 豆粒文土器 泉福寺洞穴において隆起線文土器より下層で出土し、現在形式的に最古のもので、楕円形の粘土粒を口縁部付近に貼り付けている。

- ⑬ 福井洞穴 長崎県北松浦郡吉井町にある洞穴遺跡。先土器時代から縄文時代草創期にいたる、上下七枚の文化層が検出され、第三文化層で隆起線文、第二文化層で爪形文が細石器を伴って出土している。
- ⑭ 隆起線文土器 草創期前半の土器型式で、粘土紐を口縁部外面に貼り付けている。隆線の型態によって、隆線文、細隆線文、微隆起線文などに細分されている。
- ⑮ 爪形文土器 隆起線文土器に後続する型式のもので、へら状工具、爪などの連続刺突により文様を施す。また、神宮寺型押型文の祖型と考へられている。
- ⑯ 曾根遺跡 長野県諏訪市諏訪湖底の曾根地区にあり、湖水面から約二メートル下の砂層包含層から、しじみを取る際に土器や石器が出土。土器は草創期の爪形文が曾根型石核や長脚鏃などとも出土。
- ⑰ 椀ノ湖遺跡 岐阜県恵那郡坂下町上野にあり、椀ノ湖（人工湖）の中にある。出土遺物は爪形文（椀ノ湖Ⅰ式）、表裏縄文土器（椀ノ湖Ⅱ式）と曾根型石核や矢柄研磨器が出土している。
- ⑱ 曾根型石核 小型の粗雑な石核であるが、打面から九〇度に近い剝離を行って細石刃様の剝片を作り出している。当初先土器時代終末に編年されたが、椀ノ湖遺跡で爪形文と共存することが明らかにされた。
- ⑲ 神宮寺型押型文 神宮寺式・大川式に顕著に認められる凹状押型文（ネガティブ）の総称。施文は円棒にV字状に刻目を入れたものを押圧、半回転などを行って作り出す。回転押型文（凸状・ポジティブ）の祖型と考えられ、近畿・中部地方に分布する。
- ⑳ 撚糸文 縄を棒あるいは硬質の繊維のたばなどに巻きつけた原体を、土器の表面に回転施文するもの。関東地方、草創期後半の井草・大丸・夏島・稲荷台の諸型式に顕著で、撚糸文土器群と呼ばれる。中国・近畿に中期後半の里木Ⅱ式も撚糸文を地文とする。
- ㉑ 回転押型文 早期に西日本に分布する。円棒に山形・楕円・格子などの刻目を、土器面に回転、文様を施す。
- ㉒ 山形文 神宮寺型押型文の中で、特殊な原体を回転させ施文したもので、通常一回転で一つの山形ができる。

⑳ 尾上式 滋賀県琵琶湖底より採集された土器を標式としたもの。表面に横方向に密接施文された山形文の土器である。小江慶雄『琵琶湖底先史土器序説』昭和二五年

㉑ 福本式 兵庫県神崎群神崎町福本遺跡出土の、山形文・小粒の楕円文を施した土器を標式としたもの。増田重信「播磨国福本遺跡と出土遺物」『古代学研究』一八 昭和二三年

㉒ 黄島貝塚 岡山県邑久郡牛窓町黄島にある、縄文時代の貝塚はハイガイを主としたもので、一部ヤマトシジミも含む。遺物は押型文土器、石鏃などで、押型文は楕円文を主とし黄島式と呼ばれる。立命館大学史前学研究会「黄島貝塚発掘概報」『日本史研究』三ノ三 昭和二四年

㉓ 穂谷式 大阪府枚方市大字穂谷にある縄文時代早期の遺跡。出土遺物中、粗雑な山形文を持つものを穂谷式と呼んでいる。また、その内容の多くは石山貝塚の発掘により明らかにされている。坪井清足『石山貝塚』平安学園 昭和三十一年

㉔ 複合鋸齒文 三角形の内に交差、斜行する直線を組み合わせ、連続した鋸の歯の形に似た文様。

㉕ 石山貝塚 滋賀県大津市石山寺辺町の瀬田川右岸に位置する、縄文時代早期後半の貝塚。貝層は琵琶湖産のセタシジミを主体としたもので、堆積層位内には、早期後半の石山Ⅱ～Ⅶ式が各層に分かれ出土している。坪井清足『石山貝塚』昭和三十一年

㉖ 宮ノ下遺跡 京都府竹野郡に所在する。早期後半の遺跡。上下二枚の包含層が検出され、それぞれⅠ式（下層）、Ⅱ式（上層）に分類され、Ⅰ式は平底に斜行縄文、Ⅱ式は尖底？に斜行縄文が施される。岡田茂弘「京都府宮ノ下遺跡出土の土器」『貝塚』七〇 昭和三十一年

㉗ 安土N上層式 滋賀県安土の、安土遺跡N地点上層の土器を標式としたもの。口縁部外面に粘土紐を貼り付け、その上に貝殻条痕文を施す。

㉘ 木島式 静岡県庵原郡木島遺跡出土の土器を標式としたもの。条痕文により表裏を調整、細い隆線上に刻目を施すものの他、器面に指圧痕で「せんべい」状の凹凸が特徴的である。江坂輝弥「静岡県庵原郡木島遺跡」『日本考古学年報』I 昭



和三年

⑫ 北白川土器群 京都市北白川小倉町出土の土器を標式とするもので、ⅠⅡⅢ式に細分される。梅原末治『京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』昭和一〇年

⑬ 羽状縄文 撚紐には右撚り、左撚りの二種があり、これを交互に用いると、斜縄文の条の方向が段ごとになり、綾杉状のものになる。このように施文したものを羽状縄文という。

⑭ 大歳山式 神戸市須磨区舞子山田にある、大歳山遺跡において出土した土器を標式としたもの。斜行縄文の地文の上に、細かい粘土紐を貼り付け、その上に爪形文を施す。直良信夫『近畿古文化叢考』昭和一八年

⑮ 羽島下層式 岡山県羽島貝塚出土の土器を標式としたもので、表裏に二枚貝の腹縁による条痕調整の土器。刺突文や爪形文で飾る。Ⅰ式からⅢ式に分けられている。鎌木義昌・木村幹夫『瀬戸内地方』『日本考古学講座』三 昭和三二年

⑯ 磯ノ森式 岡山県磯ノ森貝塚出土のものを標式とする。爪形文と羽状縄文を特徴とする土器群で、北白川Ⅱ式と同様のものである。参考文献⑮に同じ。

⑰ キャリバー型土器 中期に特徴的な深鉢形土器。西日本では里木Ⅱ式に多い。

⑱ 船元式土器 岡山県船元遺跡出土の土器を標式としたもので、その後同県里木遺跡の発掘調査の成果を基にしてⅠⅡⅢⅣ式に細分され、中期前半に編年されている。間壁忠彦他「里木貝塚」『倉敷考古館集報』七 昭和四六年

⑲ 里木式 岡山県里木貝塚の土器を標式とするもので、前期のⅠ式、中期後半のⅡ・Ⅲ式に細分される。Ⅱ式は撚糸文の地文上に孤状沈線などを施すもの、Ⅲ式はアルカ属貝殻腹縁による条痕文を地文とする。参考文献⑲に同じ。

⑳ 中津式 岡山県玉津市黒崎字中津に位置する、中津貝塚の土器を標式としたもの。後期初頭の磨消縄文を主体とする。水原岩太郎『岡山県浅口郡黒崎村中津貝塚発見の縄文式土器模様』昭和一〇年

㉑ 称名寺式 神奈川県横浜市金沢区称名寺遺跡出土の土器を標式とする。後期初頭関東地方一円に分布する、磨消縄文の土器。吉田格「関東」『日本考古学講座』三 昭和三二年

⑫ 福田KⅡ式 岡山県都窪郡福田町古城にある、縄文時代中期・後期の貝塚。土器はC式(中期)、KⅠ式(中津併行)、KⅡ式が出土。KⅡ式は三本線の磨消縄文を特徴としている。参考文献⑮に同じ。

⑬ 津雲A式 岡山県笠岡市西大島字名切小字津雲にある、貝塚出土の土器を標式としたもの。口縁部は肥厚した縁帯文に、同心円文様を施す。参考文献⑮に同じ。

⑭ 彦崎KⅠ式 岡山県児島郡彦崎貝塚のものを標式とするもの。内容は津雲A式とほぼ同様である。参考文献⑮に同じ。

⑮ 京都市一乗寺遺跡 京都市一乗寺にある縄文時代後期の遺跡。三本撚りの縄文を特徴とするもので、大型の注口土器を含む、一乗寺KⅠ式が設定されている。佐原真「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』七一一 昭和三六年

⑯ 宮滝式 奈良県吉野郡吉野町宮滝にある、縄文時代後期末の土器を標式としたもの。凹線文を主体とした文様を有する。末永雅雄『宮滝の遺跡』昭和一九年

⑰ 扇状圧痕 ヘナタリなどの巻貝の腹縁を、頂部を軸に六〇度程度回転押圧することで作り出された扇状の圧痕文。宮滝式に特徴的な装飾法。

⑱ 滋賀里式 滋賀県大津市滋賀里遺跡で出土した土器を標式とする。宮滝式の伝統を引く精製深鉢、黒色研磨した精製浅鉢、粗製深鉢で器種が構成される。文様は孤状沈線文が多い。坪井清足「縄文文化論」『日本歴史Ⅰ』岩波書店 昭和三七年

⑲ 丹治式 奈良県吉野郡吉野町丹治遺跡出土の土器を標式とする。深鉢型土器の口唇部に刻目を施すものがある。小島俊次『吉野川流域の古文化』昭和二九年

⑳ 樫原Ⅰ式 奈良県樫原市畝傍町出土の土器を標式とした。樫原遺跡では滋賀里・丹治・樫原式の諸型式が出土し、この中で孤状沈線に刻目を施す、七宝文と突帯文のものを樫原式と呼んでいる。このうち七宝文で精製土器を含むものをⅠ式、突帯文のものをⅡ式と分けた。末永雅雄他『樫原』昭和三六年

㉑ 黒色研磨土器 内面をいぶし焼くことにより黒色を呈し、ヘラ磨きなどを用いて研磨した土器。器形は浅鉢が多く、晩期前半に九州から本州西半部に分布する。

⑤② 木葉文 弥生時代前期の古い段階に、壺型土器の肩部を飾る、交差した直線と弧状の沈線の文様。木の葉に似ていることから、この名称で呼ばれる。

⑤③ 七宝文 直線・弧状沈線、刻目を用いた文様で、樞原式の特徴的な文様の一つ。

⑤④ 貯蔵穴 トチ、ドングリ、カヤなどの堅果類を、土に穴を掘って貯蔵するための施設。

⑤⑤ 階段状剝離 石核の外側から内部へ向って打撃を加えると抵抗が強く、自然縁片には鋭い刃が得られない。原材には階段状の剝離痕が残る。

⑤⑥ 主要剝離面 最後に剝離された剝離面。石核からの剝離面で、凸状の打溜を持つ面。

⑤⑦ 阿久津久・和田長治・秋枝芳「山の宮遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 一九七四年

⑤⑧ 関東地方の編年 山内清男「草創期の諸問題」『ミュウジウム』二二四号 昭和四四年

